



第54号

〒105 0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田原 賢道
発行人 中 原 一 照

「追悼懇」の答申に反撥

毎年の事だが8月15日に靖国神社に参詣すると、多くの庶民が踵を接している。昨年その日の参詣者は八万五千人という。見渡すと若い者が多い。遺族だとすると孫の年代になる。戦友でも遺族でもない人が拍手を打って拜んでいる姿をみると、まだまだ日本は大丈夫だと思ふ。ところが国政を担う者やマスコミの中にこの庶民の姿に背を向けている者がいる。内閣官房長官の私的諮問機関「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会」の答申が出たが、反対の声が高かったので表現に偽装をこらしているものの、結論は初めからわかっていたことである。福田官房長官はそのような結論が出るように人選したと思わざるを得ない。

そんな魂のない物体を建てたからと誰もお参りしないが、動機が不純で

あり、靖国神社を蔑ろにすることになるので絶対反対である。我々は国民を代表して内閣総理大臣に、年一度でなく春秋の大祭にきちんとお参りしてもらいたい。

ところで追悼とは過去のことについて心をいためるという意味だが、英霊に対しては感謝するということが第一で、戦友でも遺族でもない神前で手を合わせている庶民は、皆その気持であろう。元旦の未明神門がひらかれると外で待機していた人々がどっと拝殿前に詰掛けるのも、その気持があればこそである。感謝の気持がなく拝むために棒杭でも建てようとする輩は、日本人の埒外に出さねばならぬ。慰霊とは我々がよく口にする言葉であるが、これもすっかり考えねばならぬ。御祭神の御心を世に顕彰するのが最も大切な慰霊であり、御祭神もそれを望んでおられる。

我々特攻協会の会員は戦没特攻隊員

目次

「追悼懇」の答申に反撥……………	1	大津島における回天追悼式……………	21
元旦の零時に靖国神社参拝……………	2	飯野伴七理事を偲ぶ……………	22
特攻隊員の終戦について①……………	3	敵艦に突入し氏名が判明した者……………	23
川南護国神社例祭……………	14	米太平洋艦隊司令長官の日誌……………	24
水戸つばさの塔慰霊祭……………	16	沖繩「平和の礎」回天関係刻名……………	29
特操顕彰の碑々前祭……………	18	富嶽隊と万葉隊……………	32
マバラカット式典に参加……………	19		

の心情をよく承知している苦である。

遺書遺詠を見ればわかる。誰もが死んだら靖国神社に祀られると信じていた。花の都の靖国神社庭の梢で咲いて会「およ」と歌われた。いくら戦後に育つた者と雖もそのくらしい事はわかるだろう。それがわからぬ外道に国政は任せておけぬ。もう一つ忘れてならないのは、戦没特攻隊員の後に続くを信ずると言ったあの気持である。追悼がああ

の毒だつた程度の気持である。最後に申しておきたい事は、平和祈念という言葉である。本当にお前たちは祈念しておれば平和が来ると思っているのかと、聞きたくない。念仏を称えているのはまだいい。それによって安心立命できるからだ。しかし、国家のこと安心立命では済まされない。憲法の前文にいう。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」

このようなとぼけた憲法を押し載っているから、平和祈念が平和維持の手段であるような妄想に捉われてしまうのだ。

廟堂の諸公よ、平和を望むならば、祈念するより先ずやらねばならぬ事が沢山ある。有事の法体制を整備することなど喫緊事である。それが無いので北鮮に舐められている。誤った学校教育の矯正なども急がねばならぬ。

我々特攻慰霊協会の会員としては、戦没特攻隊員の精神とその行動を世に宣揚し、一大国民運動によって靖国神社をめぐる誤った動向を正常に戻さねばならぬ。

田中賢一記

元日の零時に靖国神社に参拝

震洋会 黒木 豊

毎年元旦の昼過ぎに参拝しているが今年も冥府で英霊に会った時の、話のたねにとも思っていて零時に参拝した。大鳥居をくぐったのは、まだ大晦日の二十三時半過ぎだった。拜殿目掛けて進むと、既に神門の前には多くの人が門の開くのを待っていて、その両側には篝火が焚かれている。火を焚いている者は少年団の服装をしているので、聞けば千代田区のボーイスカウト靖国奉仕団で、五十年も続けているという。偉い！ 最近少年の非行が目立つが、このような訓練をしておれば心配無用だ。文部省の役人よ、ゆとり教育などつまらんことを言わずに、このような訓練に着目すべきだ。

話が横道に逸れたが、参拝者の列に入って進むと、折りしも大太鼓が鳴り神門が開き、人の列は肅々と拜殿に進む。お賽銭を投げて二礼二拍手一礼で参拝する。

ほの暗き奥宮にうかがふ君が面

荒波越えしはむそとせも往ぬ

後がつかえているので急いでみ前を去る。

参拝者を見るに、この寒空戦友らし

い人はあまり見かけぬ。遺族だろろうか遺児といっても既に六十才を越えている筈だ。それより若い人が多い。御祭神に感謝の気持ちに駆られて来るのである。ほのぼのとした思いで人の群れを見る。英霊に対してだけでなく、この人々に対しても掌を合わせたくなる。例年初詣の一番多いのは明治神宮で次は成田山、その次は川崎大師だと聞いた。明治神宮は東京の氏神様で当然だと思ふ。成田山や川崎大師となると、家内安全商売繁昌、どうも利己的なにおいがある。それに引きかえ靖国神社をそんな気持ちで拝む人は無からう。おかげさまで祖国は安泰である、家内安全より次元が高い。

帰り際に給馬の付いた破魔矢を買う純日本の気分である。総理大臣が靖国神社に参拝すると憲法違反だと言ふ輩がいる。そんな憲法放棄してしまえという方向に頭がどうして進まぬのか。そもそも純日本人の神社に対する気持は、西行法師の作と伝えられている歌「なにごとのおはしまうかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」その気持ちになれぬ人種には反感を通り越して、哀れさを覚える。それに引きかえ今見た社頭に低頭している若い人の顔の美しかったこと。まだまだ祖国は安泰だと思つた。夜通し運行している電

車に乗ると、いい顔をした人達を多く見かけ、気分がよかつた。



特攻隊員の終戦について①

平成13年12月11日、午前10時より、財団法人偕行社3階会議室において表題の座談会が開催された。本記事は、その折の記録である。

当日の出席者は左のとおり。

陸軍 佐々木 朗 (陸士57期)

吉武登志夫 (陸士57期)

深川 巖 (陸士57期)

小川 武 (特操1期)

森木 基裕 (陸士58期)

藪下 郁男 (少飛14期)

牧 外吉 (少飛15期)

皆本 義博 (陸士57期)

田中 賢一 (陸士52期)

海軍 今泉 利男 (丙飛16期)

河崎 春美 (甲飛13期)

多賀谷虎雄 (甲飛13期)

奥野 博司 (予学4期)

荒井 志朗 (甲飛13期)

海老澤善佐雄 (海軍14志)

オブザーバー

飯野 伴七 (海兵72期)

★平成14年9月3日逝去

上田恵之助 (予学5期)

司会 菅原 道熙 (陸士61期)

以上司会者を除き17名の出席者で行わ

れた。

深川 私は司会補佐役の深川です。また

こちらは同じく司会補佐の飯野さんです。私から、まず一言お話しして、それから最上理事長、ついで飯野さんから夫々ご挨拶頂き、引き続き司会の菅原さんから座談会の進行につきご説明願います。

では「特攻隊員の終戦時における心境」について座談会に入りたいと思います。先般、新聞にも出ておりましたが、戦後の価値観だけで、戦前、戦中

を生きて来た人々を見るのではなく、当時の人々がどんな価値観を持ち、どんな選択をしたかを理解する姿勢も必要であると思います。幸い最近の世間の大きな流れとして、このことが理解されつつあると思いますが、これこそ歴史への邂逅というものであらうと私は信じております。

本日はそうした意味で価値ある座談会だと思えます。どうか充分にお話し頂きますようお願い致します。

では最上理事長ご挨拶をどうぞ。最上 本日は普段、特攻に関して論じられている視点とは違った観点から論ずるといふ、大変意義ある座談会と感じております。どうぞ忌憚のないご意見を聞かせ下さい。

特攻とは一概にどうこう言えない。各人各様のお考えがあって、特攻隊員になった、あるいは特攻隊員にされたというように思いがあるでしょう。

しかし命令であったか、志願であったかというようなことになる、また問題点が変わってくるわけです。その辺のところを今日は、じっくりとお話し頂いて、何れ会報「特攻」に掲載することにありますが、それを読んだ人がみんな「なるほど」と思うような記事ができることを期待しておりますので宜しくお願い致します。

飯野 飯野です。只今、理事長始め、深川さんからお話しがありまして、人選につきましては田中編集長から特に第一線で苦勞された人が良いという話がありまして、本日ご出席の皆さんにはご無理をお願いした次第です。

従って当時の具体的な考え方や、実際にやって来たことなど大いにお話し頂ければ有難いと思えます。

司会 菅原です。出席者名簿の最後に載っております。

私は昭和20年7月、予科士官学校在校中、航空要員となりました。まさにひよこにもなれずに終わった者です。

では座談会の進め方について説明申し上げます。

午前中は皆さん夫々、終戦までの軍歴を中心にお話し下さい。お手許の名簿順にご発言頂きます。それとお話しは5分以内とさせて頂き、その中で明確な質問があればその場で質問を頂くとして、一番最後に大きな問題点等についての質疑応答とか討論の時間を取りたいと思っております。なおこれは午後になります。

では始めに陸軍の佐々木さんからお願い致します。

佐々木 私は陸士57期生です。

昭和19年3月、航空士官学校を卒業、即日茨城県銚田町にある銚田陸軍飛行



学校に乙種学生として入校、10月末まで戦技教育を受けました。卒業直前に米軍がレイテに上陸して来ましたので卒業が二、三日早まった記憶があります。その後比島の第4航空軍、中国等の戦隊に赴任した者も何名かありましたが、当時の南方の軽爆戦隊は消耗が激しく、早急に戦力回復の必要があり従って外地にはあまり赴任してない状態でした。私は補充要員として学校に残り主として鹿島灘から三陸沖にかけての船団援護、対潜警戒などの任務に従事していました。

11月に陸軍で最初の特別攻撃隊である万葉隊が鈍田教導師団で編成されました。隊長は53期の岩本大尉で、その他の人達も55期の園田中尉、56期の安藤、川島両中尉、その他の下士官操縦者も助教出身者のベテラン揃いで、9機編成でした。残念なことにマニラ郊外上空で敵艦載機に捕捉され、将校全員が一機に搭乗していたため、全員が戦死されました。聞くところによれば軍司令官に申告の為に移動の途中とのことで形式を重んじる恐かな軍の仕打ちに怒りを禁じえなかったことでした。残った下士官操縦者達は亡くなった方の遺骨とともに全員がレイテ湾に散華されました。明けて20年の2月16、17の二日にわたり、米機動部隊による

最初の本土空襲があり、鈍田は海岸に近いため、栃木県的那須飛行場に移動しました。4月末に特攻の編成があり5月3日に命課布達式が行われました。編成されたのは20隊(双軽4隊、双襲8隊、単襲8隊)1隊6機で120機でした。このうち単襲の8隊は九州に移動、六航空軍の隷下に入り、私は双襲の神鷲第23隊に配属されました。

隊長は54期の浅野大尉、僚機は全員57期でした。6月の初めと、7月の10日頃の2回出撃命令を受けましたが天候の悪化とその他の理由で中止になりました。8月13日、三度目の出撃命令を受け、離陸準備中、グラマン約10機の攻撃を受け全機炎上爆発し、出撃不可能となりました。終戦の二日前でした。以上が経歴の概要です。

13日の16時30分頃、離陸直前にグラマンの攻撃を受け、炎上、800kg弾を搭載していたのが爆発しました。これは凄いのので50馬力のエンジンが50m位吹き飛んでしまいました。それから50分経って私の隊と同時に出撃命令を受けた双襲の20隊が離陸、東南の方向に3機ずつ2ヶ編隊で飛行して行くのがみえました。当時の情報では銚子沖に空母二群を含む機動部隊が出現しているのです。この隊の戦果については、諸説がありますが、3機突入(無線を

傍受)、他の3機は目標を発見できず帰投、二目標が後半夜まで炎上しているのが銚子の海軍監視所で確認されたとの情報が入っていたようです。翌14日は快晴でしたが、先日の攻撃のせい、終日艦載機の襲来はありませんでした。私達は予備機を整備して出撃の準備をしましたが、800kgの懸吊架が間にあわないので500kg弾に変更した記憶があります。15日の早朝、あの日霧が深く暗いので分散宿舎で寝ていると、いつもと違った爆音が聞こえました。「今日はシコルスキーが来たな」と出てみると暫く旋回していたが敵も下が見えないので間もなく引き上げていったようです。この頃から急に霧が上がり始め、間もなく快晴になりました。今日は全機で出撃とのこと

で一同盛り上がっていたところ、9時頃に、正午に陛下の放送があるので、将校は全員通信所に集合とのこと放送を聞いたんですが、雑音が酷くてよく聞きとれませんでした。あとの内容の告示で負けたことが解りました。皆呆然としてしまい、昼飯も食べずに座り込んでみると、「秘書書を焼却せよ」とのこと穴を掘って航空地図まで焼いてしまいました。たしか17日のことと思いますが、厚木からという海軍機が着陸して士官の人が降りてき

て「今回の終戦の詔勅は君側の奸の仕事であり、海軍は降伏はしない。もう一度戦うので陸軍も協力してほしい」という意味の話をして「今から郡山にゆく」と言って離陸してゆきました。今思えば厚木からといえば小園大佐の部下のひとではなかったかと思えますが、この話を聞いて皆「我々もやろう」といきり立っていたんですが、この様子を見てか、飛行師団長高品少将です

が、この方は駐英武官の経験もあり海外の事情にも詳しい方で、若い将校を集めて「英米という国は紳士の国で、決して野蛮なことをする筈はない、皆も落ち着いて今からは勉強をして国の復興に努力するように」と話されたのですが、正直のところ心に虚しいものがわだかまって納得できなかった記憶があります。結局命ぜられるままにプロペラを外されてしまい、泣き泣き収まりました。

今思えば8月15日という日は暑い日だったですね。司会、ご質問のある方、居られますか。おられないようですので、吉武さんどうぞ。

吉武 陸士57期の吉武です。私の隊は石腸隊といって18名全員、いや私一人残って、あと全員が戦死し

ています。

昭和19年10月21日に下志津の乙種学生を卒業しました。乙種学生修了は全部で14名でしたが、この14名と教官2名、助教2名を加えた18名で特攻隊を編成し、レイテへ向かいました。その当時、レイテ作戦というのは台湾沖の航空戦で、戦後に、誤報と判りました。が、我軍は大戦果を挙げたので、この時機ならレイテ島の米軍を追い落せるといふことで起した作戦でした。

ところがルソン島ポラックに着いて軍司令部へ着任の申告に行った留守に空襲により、8機が焼かれ、3機被弾という目に遭い、補充飛行機を掻き集めるのに大変苦労しました。全機が一緒に出撃することができず、7回に分かれて突入した次第です。隊長は54期の高石大尉でした。この方が軍司令部で「石腸隊員の志気は極めて高く、乙種学生では艦船攻撃の訓練を十分に積み重ねており、従って1回だけの体当り攻撃ではなく、何回も繰返しやらせてくれ」と要望したのですが、司令部では「それは特攻の主旨とは違う」としりぞけられたと聞いています。

隊長は「それなら、俺が真っ先に突っ込んで模範を示す。みんな付いてこい」と言われ、大半の7機を引き連れて12月5日、真っ先にレイテの艦船に突入

されました。私はこの高石隊長殿を深く尊敬しております。

では何故私が生き残ったのかをお話し致します。昭和19年12月12日に出撃した時、セブ島の上空でグラマンに捕捉され不時着したのです。それで生き残りました。

司会 質問はございませんか。
質問者 不時着地点は陸上、海上、何れでしたか。

吉武 セブ島沖のマクタン島の海岸までやっと辿りついた次第です。

司会 それでは次、深川さん。

深川 私は出席者名簿、上から三番目深川 敏です。第19振武隊長でした。

展開先は明野の北伊勢飛行場、使用機は四式戦で、一個隊は6機編成の6名です。57期生のことは今、話がありま

したので大体お分かりと思いますが、最初に発言された佐々木さんは双発の軽爆、二番目に話をされた吉武さんは

軍偵、そして私は戦闘でした。それから森木さんはソ連軍の侵入という事態に応じて編成された若楠特別攻撃隊と

いうことで、いろいろな事を経験された方々がここに出席されております。

私の場合は昭和20年5月3日、午後11時の訓練を終えて学生舎に戻りましたところ、北伊勢飛行場長の金沢少佐殿がお呼びだということ、すぐ部屋に向

きました。飛行場長は一語一語、言葉を含みながら静かに「明日、明野本校に行くこと、特攻隊の編成がある。特攻だ」と言われました。

5月4日、明野本校で特攻隊が編成されました。当日の編成は振武14から振武148（一式戦）、振武165から振武170（三式戦）、振武195から振武200（四式戦）の計20個隊で、一個隊は6機6名隊長は57期でした。195から200の6個隊は北

伊勢飛行場に同日展開しました。私の隊は振武195隊で、私と幹候7期、8期の少尉各1名、少飛14期の伍長3名の計6名で、全員初対面でした。

6月に入ったら早々に沖繩へ行くという話がありました。5月の末には沖繩戦線も終末状況になったので、発進延期になりました。

振武第195、第196両隊は終戦間際、九州に行きましたが、そこで終戦、私の隊は北伊勢から動くことなく、そこで終戦になったという状況です。

司会 それでは小川さんどうぞ。

小川 私は特操1期生です。昭和18年10月1日、宇都宮陸軍飛行学校、下館教育隊に入校、19年3月に卒業、直ちにネグロス島ハブリカで第32教育飛行

隊で戦技訓練中に、7月頃、実戦部隊が隣のマナプラーに展開するらしいということ、我々は島中部のラ・カル

ロタ飛行場に移りました。

教育飛行隊での教育を終了し、7月中旬頃から移動命令が出始めて、私は8月3日に「マニラ行き」を命じられました。マニラは全く平和そのものでした。兵隊は朝から酔いどれ、町中は歓楽街の雰囲気。私は2週間、マニラホテルに泊りました。昼にはバンド演奏があり、一体何処で戦争をやっているのだと思いました。

8月20日に30戦隊へ移動を命じられました。任地はマナプラーでした。何だ2週間前に出て来た所です。そこでは先ず機器取扱教育、それから場周路、空中操作、愈々戦技訓練に入ると思った9月12日、敵機動部隊が来るらしいという情報が入り、哨戒機4機が離陸した時に、雲霞の如く敵機が襲いかかって来ました。隊長が「敵機だ、かかせ」と言うのと同時に爆弾と機関銃の雨です。何がどうなっているのか分からないうちに第一波攻撃が降りま

した。私は哨壺に入っていました。飛び出しました。泣いている者、あちへ行けば足が無い者、首の無い者、上官だと思って抱き起こしたらやはり56期の針生中尉でした。

そうこうしているうちに第二波攻撃がやって来ました。真上に見えた爆弾は外れましたが、整備員に「此処にい

たら駄目だぞ。」と言った途端に爆弾が落ちました。250kg位のやつで、全身砂をかぶりました。

爆撃が終わったので立ち上がってみると整備員が起き上がらない。起こして見たら首が飛んでいました。自然と自分の頭に行きました。それが9月12日で操縦士6名がその時、戦死しました。

10日にダバオの海軍基地を襲ったミッドチャー艦隊は、12日に中部比島、セブ、ネグロス、バナイ各島に來襲しました。9月14日早朝、第12飛行師団からの命令で30戦隊は稼働機すべてを率いてルソン島のクラーク基地に移駐しました。新米も新米、やっと操縦出来る程度の私と幹候出身5名は残置することになり、10月20日迄滞在しました。

その間、私はシライ、タイサイ、バゴロド等の飛行場を廻って飛行機探しをしました。シライかタイサイに夜一人で行った時、エンジンが始動している飛行機がありました。56期と思われる中尉に「貴様、この機で爆撃に行くか」と言われしました。このようなことは軍紀、軍律違反であることは明らかなのですが、その時点でそんなことは頭の中にはありませんでした。私は乗りたいたい気持一杯でした。12、13両日に多くの戦

友が殺されたので何としても仇討ちをしたいという念に駆られました。それで20kg爆弾を2つ吊った飛行でレイテ沖の敵艦攻撃に向いました。攻撃は無事終了し、生還しました。

その日は台湾沖航空戦の一週間位前だったと思います。

10月20日になって迎えの飛行機が来て、ルソン島のバンバン飛行場に到着したら、そこには30戦隊の隊長以下隊員がいました。飛行機は一機もなく、いくら待っても補給されませんでした。

バンバンは隣のマバラカットと数料しか離れていませんが、この間にマバラカットから特攻出撃がありました。特攻の実態については分かりませんでした。飛行機も無ければ情報も届かない。只、特攻という言葉聞いただけでした。

爆弾を吊った飛行機で敵艦船に体当たりするのが特攻であると知って、比島中部4島の飛行場は消滅し、実際にレイテ沖爆撃行に参加した体験から、多数の空母、戦艦のいる所に突撃をする、これでは勝つことは難しいと、その時、本当に思いました。

11月12日、戦力快復で太刀洗に帰りました。57期4名、少飛13期3名、特操1期6名が補充になりました。2ヶ月間、戦技訓練をやりました。レイテ

の特攻が足りない時に、何事だと思いましたが、30戦隊で40機の飛行機を保ち、12機1編成で毎日午後、2回訓練を重ねました。

12月30日に比島掃還命令が出て、太刀洗を離陸、戦隊全員、1月5日屏東に着きました。その日グラマンの空襲を受け、私も空中戦に参加しました。

戦闘というのは考えてあ、すれば逃げられる、こうすれば当るといふものではない。心と体と操縦桿とフットペダル(踏棒、方向舵)が一体となって動くものです。前方50m位で友軍機が発火、墜落寸前なのを目撃し、攻撃中のグラマンを狙い撃っていたら、私が別のグラマンから撃たれている。反転回避の繰返しでした。

そういう経験を積んで30戦隊は昭和20年1月7日、比島ツゲガラオに展開しました。一時、マバラカットから3日間位、30戦隊はリングエン湾に、通常爆撃に出ました。残っていた31戦隊は、少飛、特操、幹候で編成され特攻隊でした。30戦隊には特攻命令は出ていなかったのです。

1月17日、4航空司令官の台湾への撤退は30戦隊が護衛しました。1月24日、戦隊は再び戦力回復の為、屏東に転進しました。30戦隊は3月7日、泰国防ドムアンに移駐を命ぜられ出発しま

したが、整備不良機とその操縦士6名は私を含めて20戦隊に転属となり、初めて特攻要員となりました。

司会 では次に森木さんどうぞ。

森木 陸士58期の森木でございます。58期生は200名おりまして、半分が地上。半分が航空。つまり航空は約100名です。そのうち操縦に回った者が80名、操縦以外の整備や通信に回った者は40名。これが航空の姿でした。

操縦80名の内、40名が戦闘機乗りでした。昭和20年3月25日、航空士官学校を卒業したのですが、終戦間際のため、航空訓練が出来る飛行場及び飛行機がなく、燃料も内地には不足しておりましたので、「操縦のうち優秀な者100名を戦闘機要員として満州に移し、そこで特訓を行い、先に第一線に出す」ということになりました。私はその100

名の中に選ばれました。私の所属飛行隊は名簿の所属欄にある通り、満州国湖南宮ですが、ここはジャムス(佳木斯)から汽車で2時間位の処にある新設飛行場でした。そこで99式高練に10日位乗りました。それから直ぐに、97戦に変わりました。

8月9日には、日ソ中立条約を破って、ソ連軍が朝早く、いきなり爆撃機で襲撃して来ました。朝の5時頃、まだ就寝中でした。敵機の高度は不明で

したが、爆弾は一発も飛行場に当らない。そんな状況の中で非常呼集を掛けられました。そのあと関東軍司令部から「操縦士は至急航空機に搭乗し奉天飛行場へ急行せよ」との命令がありまして、私は急遽、愛機「串」に飛び乗りハルピンに行き、そこで一泊、8月10日に奉天の北飛行場に降りました。

8月12日、ソビエトのラーという戦闘機（ミグの前身）が15機ほど奉天飛行場に向いつつありとの連絡がありました。ソ連軍は15機、我が方10機、私達は単に乗り、高度100mで待ち伏せておりました。ソ連機は我々を舐めていたのか高度100mで進入して来ましたが、我々からすれば一番撃ち落し易い処に来て呉れたわけです。

隊長の「突っ込め」という手の合図で私は突進し、一撃で敵1機を撃ち落しました。約10分間の戦闘でもう1機、計2機を落したのです。敵ソ連機は7機を撃ち落され逃げて行きました。私は意気揚々と着陸したところ、隊長島田中佐が「ご苦労であった。只今、関東軍司令部から命令が来ている。

若楠特別攻撃隊を率いて約50輛のソ連戦車群を特別攻撃せよ」とのことでありました。若楠とはご存知楠木正行のことです。この若楠攻撃隊4機を率いて8月17日奉天（現瀋陽）の西100km

にある「阜新」に向い、その地に集結しているソ連軍戦車部隊に突入せよ。つまり死ねという命令でした。先程、最上さんが言われたように命令か、志願かという問題について言うならば明らかに命令でした。もちろん、いつても死ぬ覚悟は出来ていましたが、命令によって自分の戦闘機に20kg爆弾を積み込んで敵戦車群に突っ込むという特攻でした。

大体、この辺で終わりますが、特攻隊になりました時、同じように特攻の命令を受けた同期生の中には足が震えたという者もありましたが、私は命令を受けた時、一瞬考えたことは「あゝ、これで死場所を得た」という思いが一つ、次に「おふくろに遇いたくないな」ということでした。親父ではなくて、おふくろでした。そして出来ればもう一度富士山を見て死にたいなとも思いました。そんなことが頭の中をサッとよぎったことを記憶しております。

そして8月15日の朝、10時頃整備兵と一緒に私の愛機に爆装を終った時、正午に天皇陛下の放送があったというのを隊長から言われました。第二次大戦が終わったのです。お陰で今も生きております。

司会 では次に藪下さん
藪下 少年飛行兵14期の藪下です。

ご存知とは思いますが、少年飛行兵は昭和9年に第1期生が入校し、全20年には第20期生が入校し、総計4万5千名が入校しました。それでも海軍に比べるとかなり少ない数でした。

我々14期生は昭和17年4月、東京陸軍航空学校に100名が入校しました。入校1年後、適性に応じ、操縦、整備、通信に分かれました。大体500名が操縦に回りました。昭和18年4月、宇都宮と熊谷の陸軍飛行学校に夫々入校、昭和19年4月から飛行訓練が始まりまして全年7月には中練の教育が終わり、ついで横芝の第39教育隊で高練の訓練を受けました。その年の12月、淡路にある第10錬成飛行隊に移り、一式戦の一型と二型、それに四式戦の未習教育を受け、20年3月に全教育期間を終了したわけです。3月30日頃、最初の連中は明野に集まれということになり、喜んで出発して行きました。

中には戦隊要員だと言って喜んで行った者もいましたが、その人達は翌4月には特攻で戦死しております。我々残された者は10錬飛に留まっていたが、ぼつぼつ戦隊に出て行きました。我々も20年5月、下館の第12飛行団に転属になりました。団長は鈴木五郎中佐です。その隷下には第1戦隊と第11戦隊とがあり、14期は8名ずつ分か

れて配属になりました。

その後、第12飛行団は高萩飛行場に移動し、首都防衛の任務に当たりました。終戦まで、航空士官学校57期の佐伯中尉以下、下士官6名が防空戦闘で戦死しております。我々も戦闘要員でしたが、20年6月、将校だけが飛行師団に呼ばれて、特攻命令を受領して来ました。我々4名はその配下となり、転科の57期渋谷中尉が隊長、特操1期の人が副隊長、その他少飛14期4名、計6名で一隊が編成されました。その当時、我々はただ特攻隊と言うだけで、振武隊なのか、神鷲隊なのか分かりませんでした。終戦後、渋谷隊長にお会いした時、そのことを伺ったら「俺たちは第1航空軍だったから神鷲隊だった」と言われて始めて知った訳です。我々は20年6月に特攻命令を受けてから、その為の訓練が加わりました。それからは夜は防空、昼は特攻の訓練という日々でした。当時、戦隊長は54期の四至本大尉、飛行隊長は56期、あと57期の方々でした。大体以上が私の軍歴です。

司会 何か質問は？ では牧さん……
牧 只今14期の藪下さんが大体お話しされましたので私の軍歴を簡単に申し上げます。

昭和17年10月、東京陸軍航空学校に

第10期陸軍生徒として入校しました。6ヶ月後、学校制度改編により、学校名は「陸軍少年飛行兵学校」となり、私は第15期少年飛行兵となりました。

18年9月、同校卒業、空中勤務適性検査に合格、分科も操縦に決定したので、熊谷陸軍飛行学校に入校、階級も上等兵となり、空中勤務者として、基本教育を受け、19年3月、分校の群馬

県新田教育隊に入隊、実技の基本操縦を修了しました。全年6月、満州平安鎮の第24教育飛行隊戦闘班に配属され

97戦で戦技を習得しました。全年11月北朝鮮温井里の第19教育隊に配属となりました。教官はあの高名な伊藤直之

(少候22期)さんです。防空任務の傍ら戦技訓練中、特攻要員志願者応募の要請を受け、志願した処、特攻要員に指名されました。それで第53航空師団

配属となり、第95振武隊々員を拝命、陸軍伍長に進級しました。昭和20年5

月、熊谷で特攻機(95練改装)を受領後、兵庫県三木飛行場に集結しました

が、そこでは朝鮮、連浦第11教育隊で編成された第92振武隊、第93振武隊と

した滑走路一本の簡単なものでした。

森の中の三角兵舎で起居し、『と号』待機特攻要員として、爆弾の代りにドラム缶一つを後部座席に載せて、志布

志灣、日南海岸周辺で突入訓練中、8月15日、終戦を迎え、18日部隊解散により、出身地の富山へ帰りました。

以上です。 司会 次に皆本さんお願いします。皆本 私は陸士57期生で、昭和19年4

月20日、陸士卒業と同時に工兵から船舶に転科しました。船舶兵は昭和18年

秋に新設された兵科で、我々57期65名が船舶兵となったわけです。この内、

3%が戦車、1%が工兵からでした。広島が戦車、1%が工兵からでした。広島

の字品に行き、船舶練習部で教育を受け、7月1日、任官と同時に私を含め

3名のみが司令部付となりました。配

で、当時、硫黄島が危殆に瀕していた

為か、各島嶼所在の戦隊長は在隊、依って代理者出席となり、軍司令部に出頭

して会議に参加致しました。 牛島満第32軍司令官、太田海軍沖繩

方面根拠地司令官ご臨席のもと、夫々戦隊の作戦運用について報告、そこで

各隊は敵の予想上陸正面の海上に、どのような隊形で、どのような攻撃をす

るか、砂盤の上で報告、列席の軍及び根拠地隊幕僚から質問及び指導があ

りました。戦技演習を終わって帰隊しました。3月23日の昼食時、グラマン艦

載機10数機の猛烈な攻撃を受けたのですが、これは通常攻撃ではないだろう

から、翌日は恐らく来襲しないと思いましたが、前日にも増して、猛攻撃を

戦隊10隻の船を率いて洋上移動すれば

全部、やられます。従って攻撃する以外に手はありません」と。この意見具

申により、転進は変更になったのであります。結果的に、夜が明けたら前日

にも増して熾烈な攻撃を受けました。沖繩本島に所在する同種部隊の企図秘

匿のため、全局面を慮り、艇を自沈させるということ、そうしました。ただ2隻だけは沈めるだけが能では

ないと思い、残しました。この艇に船舶団長が乗って、沖繩本島の軍司令部

に向かいましたが、洋上で消息を絶つて、我が部下ともども戦死されております。その後、我々は乏しい兵器で、

陸上戦闘をやったわけですが、酷しい状況の中で終戦を迎えました。 わが同期生65名が船舶兵科となりま

したが、その内、戦死29名、幹部候補生10期の戦没者比率は71%、11期生が

85%

です。また特別幹部候補生1期

(少年飛行兵に相当)は69%が戦死

しております。彼らは乏しい兵器、困難

な戦況下で、よく頑張ってくれました。

菅原 最後に田中さんどうぞ。

田中 今日集りには航空特攻と空挺

特攻を併せて採り上げようと思ってい

ました。空挺特攻隊には三つのグルー

プがあ

った。一つは義烈空挺隊の不時

着生き残り組です。二番目は海軍の指

場へ転進。この飛行場は畑を急遽改造

した滑走路一本の簡単なものでした。

森の中の三角兵舎で起居し、『と号』

待機特攻要員として、爆弾の代りにド

ラム缶一つを後部座席に載せて、志布

志灣、日南海岸周辺で突入訓練中、8

月15日、終戦を迎え、18日部隊解散に

より、出身地の富山へ帰りました。

以上です。

司会 次に皆本さんお願いします。

皆本 私は陸士57期生で、昭和19年4

月20日、陸士卒業と同時に工兵から船

舶に転科しました。船舶兵は昭和18年

秋に新設された兵科で、我々57期65名

が船舶兵となったわけです。この内、

3%が戦車、

1%が工兵からでした。広島

の字品に行き、船舶練習部で教育を受

け、7月1日、任官と同時に私を含め

3名のみが司令部付となりました。配

置されたのが海上挺進特別攻撃研究班

でした。隊長は44期、副隊長が53期で

我々57期が3名、その他幹候9期の人

達、合計18名でした。研究が終りまし

たら動員が始まり、フィリピンに向

う船団は優速船団と称して、20ノット

を出せる三井船舶の大型船で移動しま

した。沖繩に展開したのは劣速船団で

平均5ノットという遅い船足です。

沖繩展開後、直ちに訓練開始。3月

10日、軍司令部において、陸海軍海上

特攻の作戦会議が開かれるということ

で、当時、硫黄島が危殆に瀕していた

為か、各島嶼所在の戦隊長は在隊、依

って代理者出席となり、軍司令部に出頭

して会議に参加致しました。

牛島満第32軍司令官、太田海軍沖繩

方面根拠地司令官ご臨席のもと、夫々

戦隊の作戦運用について報告、そこで

各隊は敵の予想上陸正面の海上に、ど

のような隊形で、どのような攻撃をす

るか、砂盤の上で報告、列席の軍及

び根拠地隊幕僚から質問及び指導があ

りました。戦技演習を終わって帰隊しま

しました。3月23日の昼食時、グラマン艦

載機10数機の猛烈な攻撃を受けたので

すが、これは通常攻撃ではないだろう

から、翌日は恐らく来襲しないと思

いましたが、前日にも増して、猛攻撃を

受けました。軍司令部に対し、「戦況

判断は如何か」と打電した処、「状況

不明、甲号戦備に準じて行動すべし

」との返電です。言い換えますと、作戦

発動がないまま結果的には作戦に入っ

たわけです。25日の晩に作戦準備状況

視察のため、船舶団長大町茂大佐が来

島され、そこで判断したのが「このま

までは、この慶良間諸島における戦隊は

全滅する。よってこれから沖繩本島に

転進させよ」ということになりました。

そこで私皆本少尉は団長に対して申し

上げました。「この状況の中で、一個

戦隊10隻の船を率いて洋上移動すれば

全部、やられます。従って攻撃する以

外に手はありません」と。この意見具

申により、転進は変更になったのであ

ります。結果的に、夜が明けたら前日

にも増して熾烈な攻撃を受けました。

沖繩本島に所在する同種部隊の企図秘

匿のため、全局面を慮り、艇を自沈さ

せるということ、そうしました。

ただ2隻だけは沈めるだけが能では

ないと思い、残しました。この艇に船

舶団長が乗って、沖繩本島の軍司令部

に向かいましたが、洋上で消息を絶つ

て、我が部下ともども戦死されており

ます。その後、我々は乏しい兵器で、

陸上戦闘をやったわけですが、酷しい

状況の中で終戦を迎えました。

わが同期生65名が船舶兵科となりま

したが、その内、戦死29名、幹部候補

生10期の戦没者比率は71%、11期生が

85%です。また特別幹部候補生1期

(少年飛行兵に相当)は69%が戦死

しております。彼らは乏しい兵器、困難

な戦況下で、よく頑張ってくれました。

菅原 最後に田中さんどうぞ。

田中 今日集りには航空特攻と空挺

特攻を併せて採り上げようと思ってい

ました。空挺特攻隊には三つのグルー

プがあ

った。一つは義烈空挺隊の不時

着生き残り組です。二番目は海軍の指

場へ転進。この飛行場は畑を急遽改造

した滑走路一本の簡単なものでした。

森の中の三角兵舎で起居し、『と号』

待機特攻要員として、爆弾の代りにド

ラム缶一つを後部座席に載せて、志布

志灣、日南海岸周辺で突入訓練中、8

月15日、終戦を迎え、18日部隊解散に

より、出身地の富山へ帰りました。

以上です。

司会 次に皆本さんお願いします。

皆本 私は陸士57期生で、昭和19年4

月20日、陸士卒業と同時に工兵から船

舶に転科しました。船舶兵は昭和18年

秋に新設された兵科で、我々57期65名

が船舶兵となったわけです。この内、

3%が戦車、1%が工兵からでした。広島

の字品に行き、船舶練習部で教育を受

け、7月1日、任官と同時に私を含め

3名のみが司令部付となりました。配

置されたのが海上挺進特別攻撃研究班

でした。隊長は44期、副隊長が53期で

我々57期が3名、その他幹候9期の人

達、合計18名でした。研究が終りまし

たら動員が始まり、フィリピンに向

う船団は優速船団と称して、20ノット

を出せる三井船舶の大型船で移動しま

した。沖繩に展開したのは劣速船団で

平均5ノットという遅い船足です。

沖繩展開後、直ちに訓練開始。3月

10日、軍司令部において、陸海軍海上

特攻の作戦会議が開かれるということ

で、当時、硫黄島が危殆に瀕していた

為か、各島嶼所在の戦隊長は在隊、依

って代理者出席となり、軍司令部に出頭

して会議に参加致しました。

牛島満第32軍司令官、太田海軍沖繩

方面根拠地司令官ご臨席のもと、夫々

戦隊の作戦運用について報告、そこで

各隊は敵の予想上陸正面の海上に、ど

のような隊形で、どのような攻撃をす

るか、砂盤の上で報告、列席の軍及

び根拠地隊幕僚から質問及び指導があ

りました。戦技演習を終わって帰隊しま

しました。3月23日の昼食時、グラマン艦

載機10数機の猛烈な攻撃を受けたので

すが、これは通常攻撃ではないだろう

から、翌日は恐らく来襲しないと思

いましたが、前日にも増して、猛攻撃を

受けました。軍司令部に対し、「戦況

判断は如何か」と打電した処、「状況

不明、甲号戦備に準じて行動すべし

」との返電です。言い換えますと、作戦

発動がないまま結果的には作戦に入っ

たわけです。25日の晩に作戦準備状況

視察のため、船舶団長大町茂大佐が来

島され、そこで判断したのが「このま

までは、この慶良間諸島における戦隊は

全滅する。よってこれから沖繩本島に

転進させよ」ということになりました。

そこで私皆本少尉は団長に対して申し

上げました。「この状況の中で、一個

戦隊10隻の船を率いて洋上移動すれば

全部、やられます。従って攻撃する以

外に手はありません」と。この意見具

申により、転進は変更になったのであ

ります。結果的に、夜が明けたら前日

にも増して熾烈な攻撃を受けました。

沖繩本島に所在する同種部隊の企図秘

匿のため、全局面を慮り、艇を自沈さ

せるということ、そうしました。

ただ2隻だけは沈めるだけが能では

ないと思い、残しました。この艇に船

舶団長が乗って、沖繩本島の軍司令部

に向かいましたが、洋上で消息を絶つ

て、我が部下ともども戦死されており

ます。その後、我々は乏しい兵器で、

陸上戦闘をやったわけですが、酷しい

状況の中で終戦を迎えました。

わが同期生65名が船舶兵科となりま

したが、その内、戦死29名、幹部候補

生10期の戦没者比率は71%、11期生が

85%です。また特別幹部候補生1期

(少年飛行兵に相当)は69%が戦死

しております。彼らは乏しい兵器、困難

な戦況下で、よく頑張ってくれました。

菅原 最後に田中さんどうぞ。

田中 今日集りには航空特攻と空挺

特攻を併せて採り上げようと思ってい

ました。空挺特攻隊には三つのグルー

プがあ

った。一つは義烈空挺隊の不時

着生き残り組です。二番目は海軍の指

場へ転進。この飛行場は畑を急遽改造

した滑走路一本の簡単なものでした。

森の中の三角兵舎で起居し、『と号』

待機特攻要員として、爆弾の代りにド

挿下に入って、一式陸攻に乗ってサイパンに強行着陸する特攻隊。三番目は「ク」18という滑空機に乗って、沖縄の飛行場に強行着陸する特攻隊。義烈隊以外は、終戦のため実現しなかったのです。これらについて、然るべき者に依頼して、出席してもらおうと思っただけですが、適任者が東京近辺に在住していないので、対象者には当時の心境を書面にして出して貰うよう考えています。これら三グループについて、証言できる適任者を掌握していませんので、記事は作ります。(前号に掲載済み) 司会 これで陸軍関係が終わりましたので、海軍関係にうつります。今泉さん、どうぞ。

今泉 私は丙飛16期です丙飛というのは海軍部内選抜のパイロットで、第一期は大正7年で、操練と言っていた57期から卒業時に名称が丙飛1期と改称され以下順次17期までありました。

丙飛は昭和17年入隊者を以て中止となり、このあと昭和18年の4月から特乙飛というのができまして丙飛のあとを継いだ形となりました。

したがって海軍のパイロットは操練から始まり、丙飛は部内選抜の中でも一番古い存在ですから戦死者も非常に多い。私は零戦のパイロットですが、昭和18年5月から筑波航空隊で中間練

習機通称「赤トンボ」で6ヶ月訓練を受けて11月に卒業、19年の11月末に、海南島の戦闘機部隊へ移り、そこで延長訓練(戦闘機の)を4ヶ月受けて、その後、海南島にある2空という零戦部隊に配属されました。そこから南寧の飛行場を空襲していたのですが、昭和19年10月12日、台湾沖航空戦が始まりました。10月12、13、14、15日と、空中戦をやりました。いわゆる台湾沖航空戦です。本隊は18日に海南島に帰投したのですが、我々9機はフィリッピン方面に後退したアメリカ軍の航空母艦を攻撃するよう命令を受けて追撃しました。10月27日でした。フィリッピンのマルコット飛行場へ進出した頃、つまり10月25日には関大尉以下20名が特攻隊で突入しておりました。

私たちはマルコットという飛行場に着任したのですが、毎日50機くらいのグラマンが来まして、陸海軍の戦闘機はその迎撃に終始しました。結局一人減り、二人減り、最後には二人だけ残って我が部隊は全滅しました。飛行長から「お前達は2空の特攻隊に行け」と言われて、マバラカットに展開していた2空へ転進したわけです。

兎に角、命令どおり2空へ行きましたら、副長の玉井中佐が「よし分かった」

と言いましたが、特攻には1回も出撃させて貰えませんでした。ご存知ないかもしれませんが、搭乗すべき飛行機が全部、特攻機で突入したので、搭乗員だけが50名程残りました。その後隊長以下、ピナツボ山に待避しておりました処、昭和20年1月半ば、大本営から特攻隊員をフィリッピンから救出せよとの命令が出たので、ツゲガラオの飛行場に向えと言うことで我々はトラックに乗り、川や山を越え、約20日間でツゲガラオの飛行場付近で待機していました。米軍の進撃が速いので、ツゲガラオの飛行場は占拠されているものと思っていたが無事でした。聞く処によると整備員達が米軍戦車に体当たり攻撃して、これを阻止しているが、それも長くは続くまいとのことでした。夜間、一式陸攻2機が着陸したが飛行場周辺からゲリラに攻撃されたけれども、10分間位で約50名のパイロットは全員飛び降り、その場を去ることが出来ました。フィリッピン在の陸軍部隊の最後は近いのではないかと推測し、皆後髪を引かれる思いでした。

パイロットは、こと飛行機となると行動は俊敏です。ふたたび台湾に戻り、玉井司令から2空を編成し、全員神風特別攻撃隊大義隊と命名された旨、伝達があり、豊田連合艦隊司令長官より

短刀が授与されました。今度こそ、我が人生も22才で終局の航跡に入ったと覚悟しました。特攻攻撃は何回も目撃しましたが、250kg爆弾では敵空母を撃破することは至難の業です。そこで、玉井司令に「零戦に500kg爆弾を積んで如何か」と皆で提案しましたが、却下されました。昭和20年4月14日、南西諸島方面に英空母群が遊弋しているとの情報により、私達は神風特別攻撃隊大義隊員として250kg爆弾を抱いて、出撃することになりました。立派に散るぞと心に念じ石垣島を飛び立ちました。時に午前6時00分、直援は2機、爆撃隊指揮官は予備学生出身の中尉、私今泉他8機。私は小隊長として僚機を連れて高度300mで飛行しました。

昭和16年海軍に入り、以来パイロットとして苦楽を経験し、自信と誇りを持っていました。海上航法は非常に難しいものです。指揮官の中尉は予備学生13期、昭和18年学徒動員で海軍に入り、操縦者となったわけで、技量は充分と言えないが、海上航法は出来ると思っていました。若し無理であるなら、私が替わる心算でいました。

沖繩へ向う飛行中、母親のことが頭をかすめました。若くして亡くなった母親の顔が臉に浮かびました。ふと気がつくると直掩機が見当たらない。さては

敵機到来かと思ひ探したが、見つからない。我々は爆弾を抱いており、敵機に発見されれば一発で撃ち墜され、それこそ敵も見ずに無駄死となる。すでに敵の電探(レーダー)にキャッチされているだろう。そうこうしているうちに突然一小隊長がエンジン不調で引き返すと合図して来たが、私は知らん顔していたら指揮官一機が反転して行きました。航法も熟知していないだろうにどうしようもありません。8機いた直掩機もエンジン故障等で引返し、3機になってしまいました。母艦搭乗員の丙飛の後輩と、甲飛11期の一飛曹を率い、何としても敵空母に体当たりしたいと願いました。快晴の高空にも高度1000m付近には乱雲があり、それを利用しながら飛びました。間もなく、予定地点だ。これから体当たりすると言うのに気持は落着いていました。列機は何を考えているのであろうか、部下を近くに呼び、傍らを離れないよう合図しました。一緒に突入するぞとサインを送り、更に飛び続け、敵空母を探し求めました。直掩機なく、裸同然の我々は敵に発見されぬよう乱雲の中に入ると翼に雲が当り、サーサー音を立てていました。そろそろ前衛の敵駆逐艦が出て来る頃だと思ひ、列機に合図して上空を見張るよう指示、私は雲下の洋

上を敵艦発見に努めました。

は早過ぎたのかと思ひ、機首を比島に向けました。洋上航法はコンパスを頼りに時間と速度、風向、風力を計算しながら2、3分に変針しながら飛ぶ。速度は出ているし、海上では目標がありませぬから方向が解らなくなる。左側に航空地図と記録板をゴムで止め、それをチェックしながら約1時間、三角航法で飛んでいたのですが発見出来ない。気が苛立って来る。列機には余裕ありと思わせるため、笑って自分の頬を敲いて見せましたが、顔は引き吊っていたかもしれませぬ。私は先刻の駆逐艦に体当たりすることを決心し、甲飛11期のパイロット(存命)に、戦果確認の上、玉井司令に報告するよう連絡しました。高度1000mで飛び続け、例の駆逐艦を発見、グラマンを警戒しつつ敵駆逐艦の直上から急降下に入りました。敵は全砲火で応戦して来ましたが、私は全速で突入しました。敵艦が大きく右に変針したので、私は機を右に捻りました。その瞬間、母の顔が前面風防にスーッと浮きました。ハッとした時、機軸が駆逐艦から外れてしまったのです。操縦桿を一杯右に捻ったのですが間に合いませんでした。止むなく爆弾を投下。至近弾で、駆逐艦左舷前方に水柱が上って一瞬、同艦は見えなくなりました。私は海面すれす

れ全速で退避しましたが、返す返すも撃沈できず残念に思っております。司会 何か質問はございませんか？では杉田さんがご欠席なので、河崎さんお願いします。

今日はいつもと違って特攻命令を受けました。私も同じ思いであったが、250kg爆弾を抱いているのだ。その事を彼は忘れたのかと思ひました。雲上へ出れば危険であること等、説明する閑はない。素敵に懸命でした。その時雲の切れ間から零戦1機が急降下して行くのが見えたのです。すると間髪を入れずグラマン4機が追尾するのが見えました。助けに行きたいが、それもならず、私は咄嗟に列機と共に雲中に入りました。しばらく飛んでいるうちに機体が左右に煽られました。爆風だと直感し、雲下に急いで出ました。見ると、敵駆逐艦が盛んに主砲を撃ち込んで来ました。近くに敵空母がいると思ひ、速度を上げて突進しました。

敵の電探射撃も見上げたものと思ひながら索敵しましたが、空母は発見出来ませんでした。情報によれば比島方面から英国機動部隊が沖繩に向つていたとのことでした。すると我々の特攻

上を敵艦発見に努めました。すると突然2番機が、上昇するよう合図して来たのですが、雲上は快晴、敵機に発見され易い、私は首を振ったのです。戦闘機は高度飛行をしている方角と遭遇した場合、有利な空中戦が出来ます。2番機パイロットも腕に自信があるようで空中戦を望んでいたでしょう。私も同じ思いであったが、今日はいつもと違って特攻命令を受けました。私も同じ思いであったが、250kg爆弾を抱いているのだ。その事を彼は忘れたのかと思ひました。雲上へ出れば危険であること等、説明する閑はない。素敵に懸命でした。その時雲の切れ間から零戦1機が急降下して行くのが見えたのです。すると間髪を入れずグラマン4機が追尾するのが見えました。助けに行きたいが、それもならず、私は咄嗟に列機と共に雲中に入りました。しばらく飛んでいるうちに機体が左右に煽られました。爆風だと直感し、雲下に急いで出ました。見ると、敵駆逐艦が盛んに主砲を撃ち込んで来ました。近くに敵空母がいると思ひ、速度を上げて突進しました。

敵の電探射撃も見上げたものと思ひながら索敵しましたが、空母は発見出来ませんでした。情報によれば比島方面から英国機動部隊が沖繩に向つていたとのことでした。すると我々の特攻

上を敵艦発見に努めました。すると突然2番機が、上昇するよう合図して来たのですが、雲上は快晴、敵機に発見され易い、私は首を振ったのです。戦闘機は高度飛行をしている方角と遭遇した場合、有利な空中戦が出来ます。2番機パイロットも腕に自信があるようで空中戦を望んでいたでしょう。私も同じ思いであったが、今日はいつもと違って特攻命令を受けました。私も同じ思いであったが、250kg爆弾を抱いているのだ。その事を彼は忘れたのかと思ひました。雲上へ出れば危険であること等、説明する閑はない。素敵に懸命でした。その時雲の切れ間から零戦1機が急降下して行くのが見えたのです。すると間髪を入れずグラマン4機が追尾するのが見えました。助けに行きたいが、それもならず、私は咄嗟に列機と共に雲中に入りました。しばらく飛んでいるうちに機体が左右に煽られました。爆風だと直感し、雲下に急いで出ました。見ると、敵駆逐艦が盛んに主砲を撃ち込んで来ました。近くに敵空母がいると思ひ、速度を上げて突進しました。

敵の電探射撃も見上げたものと思ひながら索敵しましたが、空母は発見出来ませんでした。情報によれば比島方面から英国機動部隊が沖繩に向つていたとのことでした。すると我々の特攻

予科練を終えて、次に飛練で鍛えられ、延長教育でしごかれ、半年先でなければ飛行機に乗れない。一方マル兵器のほうは2、3ヶ月の訓練で、第一線に行ける。それじゃこの方が早いや……という気持もあったのと予科練卒業予定でありながら行先の航空隊の話も進まないような状況もあって、特攻要員に応募したわけでした。だから我々は19年9月1日に特攻隊には編入

されましたが、特攻隊員ではなく特攻要員と言われておりました。これから養成されるわけです。回天は魚雷に乗り込むのですが、誰も乗ったことがありません。訓練を受ける我々一人一人がテストパイロットということですが、いろんなケースを資料として研究会が重ねられ、絞られました。20年1月頃、マニュアルが出来上がったような状況でした。私は2月から訓練開始。6月に高知の西、須崎という所に展開していた第23突撃隊に配属されました。

先発組はすでに5月から配置についていました。私は6月で、最初の一ヶ月、空襲が他所より早目にあるな位に思ってたのですが、8月に入ってからは回天が出撃した時、故障した場合には何処へ待避するのか、調査するため、沿岸視察に出かけました。そして2日目の晩に、ソ連が参戦したからすぐ帰隊せよと言われ、視察の途中で引き返しました。8月12日頃、一回、出撃しました。潮岬方面に敵機動部隊が接近、四国沖を目指しているとの情報があり、待機させられました。

夜になり、一杯飲んで就寝。翌日、早朝から待機ということになっていましたが、敵が引き返したということ以待機解除になりました。処が、8月15日、終戦の放送を聞いてから皆、気違

いのような状態になっていたところ、翌16日の夕方、また出撃命令が出ました。私がいた23突の配下部隊、震洋188震という隊で爆発事故が起きました。25杯いた中で23杯爆発して11名が死にました。この事故で敵が来襲したという誤報が流されたわけです。8月の17、18日頃までは、もうてんやわんやの状態でした。以上です。

質問者 協会発行の会報「特攻」を見ますと、回天はウルシーに大部行ってますね。

ウルシーは敵地上部隊が集結しているということで襲撃したのですか？河崎 いや敵機動部隊の基地でした。我が方はそれを奪回することが主たる目的で、回天の第一目標としたわけです。二度、出撃しました。

司会 では多賀谷さんどうぞ。多賀谷 只今お話しになった河崎さんは予科練出身で、全国回天会の事務局長をしておられます。今日はお見えになっておられませんが小灘利春さん(海兵72期)が会長をしておられます。

小灘さんは基地回天隊の第2回大隊八丈警備隊の隊長で終戦までそこに居られました。私は33突撃隊として、宮崎県油津を本部にして、日向灘に展開していた回天部隊の第5回大隊におりました。

注、油津隊長は「同期の桜」作者・粘佐大尉(海兵71期)でした。栄松という漁村に水見隊長(予・3)

以下7名が待機。それに隊付整備員7名、更に基地隊員が500〜600名位配置されていたと思います。

油津方面の基地間では横の連絡が無く、戦況については全く知らされておりませんでした。ご存知のとおり水中

特攻回天は潜水艦に搭載され、その艦から発進出撃し、敵艦を撃沈することを使命としていました。ウルシーの場合、停泊艦攻撃つまり湾内停泊中の敵艦を隠密裡に潜入襲撃し、撃沈するという一人乗り人間魚雷と称するものです。次いで作戦は航行艦襲撃となり、

終戦まで続きました。当時の戦局では潜水艦が出撃しても敵の反撃にあって掃投できなくなる。数も減る、という

が故障して出撃できず、二回も三回もやり直したという苦労話がありました。我々の派遣された基地回天隊第23突(四国高知方面)や、第33突(九州東海岸方面)、その他にもありますが敵が想定している本土攻撃の上陸地点と

予想された前線地帯に展開していきなりました。前述のとおり、戦局について殆ど分かっていませんでしたが、ただ毎日上空をB29が定期的に朝北上し、また

帰って行くという状況を切齒扼腕しながら見ていました。また直ぐ隣の外ノ浦港にあった造船所がグラマンに銃撃され、建造中の木造船が次々に燃やされるという場面を目の当りにし、私達も銃撃の洗礼を受けたこと等、印象に強く残っております。そんな状況の中で、格納庫に収容してあった回天で、常に訓練を続けていました。

敵が何時、上陸して来るのか、それに対し、どのようにここから出撃して行くか、四六時中、作戦を練っていました。この隠置場所から如何に洋上へ出て敵の艦船に激突するか、航路や所要時間の調べ等、訓練に明け暮れました。

我々が出撃要員ではあったが、出撃搭乗員ではありませんでした。「出撃」とは潜水艦から敵艦船に突入する場合のことを言い、基地搭乗員は「陸路出撃」でした。つまり「特攻」ではあっても普通の兵と扱いは同じでした。

なお第1回大隊(基地回天隊白龍隊)は輸送船撃沈により沖繩海域で全員戦死と認定されています。またこれらの記録は当時の大津島訓練基地の記録によるものです。要約しますと、人間魚雷回天特攻作戦は本来潜水艦に搭載して、洋上で発進し、敵艦を撃沈するのが目的でした。

それに並行して戦争末期には、潜水艦が少なくなった為もあってか、出撃要員を敵の上陸予想地点に配して、本土決戦に備えたというのが実情のようです。以上です。

質問者 予科練の甲13期は我々と同年輩ですね。操縦の方に回った人もいたんですか？

多賀谷 いました。神風特攻隊で戦死された方も居り、多くが飛練に配属されて行ったと思います。

司会 では奥野さん。どうぞ。

奥野 私は予備学生でした。昭和18年10月21日、明治神宮外苑競技場で行進した仲間です。我々は飛行科と兵科に分かれ、飛行科に行った者は14期、兵科に行った者が4期でした。はっきりした数は分かりませんが、飛行科約300名、兵科約300名、12月10日海軍に入りました。私達は二等水兵となり、予備学生の資格試験を受けて資格を取得、前述のとおり飛行科と兵科に分かれ、昭和19年12月25日、少尉に任官致しました。基礎教育は横須賀の武山海兵団で、6ヶ月間受けて、それから実科学校として、電測学校、通信学校等に分かれて教育を受けたのですが、私は水雷学校で更に6ヶ月の教育を受け、12月25日海軍少尉に任官、全日付で震洋隊隊長を命ぜられました。つまり命

令で、特攻隊に配置されたわけです。任官時に回天に行った者、特潜に行

た者、震洋隊に回された者、これら総て命令でした。志願ではありません。大々道は違っても、行きたいと願って

いた気持は皆同じでした。私たちには搭乗員50名が配属されて来ました。この人達は全員予科練出身で、飛行機搭

乗員を志したのですが、乗る飛行機がなく、水中特攻、水上特攻に回されて来たわけです。少尉に任官した翌日、

50名の部下を与えられました。士官は

1期上の3期で隊長、それに4期2名の計3名でした。我々が「突っ込め」と言えばこの50名は我々の後に付いて

来たわけです。一度出撃したら、それで終り。そのような我部隊に侍従武官の野田六郎大佐が来られ「陛下は只突っ

込んでぶつかるとだけという兵器はいかん!!」とおっしゃっている。陛下は、

ぶつかる直前に回避するということで、この兵器を許可されたのだ」と話をさ

れました。我々の震洋特別攻撃隊は搭乗員50名、整備員他総員100名です。敵艦が来るまでは穴の中、あるいは三角

兵舎等に待機していました。私も佐多岬の先で、終戦まで夜間訓練を続けていたのです。

質問者 予備学生14期は学徒出陣式を

に入ってますね。一般兵との関係はどうなのですか。

奥野 予備学生は総て志願でした。我々同期だけは先ず二等水兵になり、それから予備学生を志願したわけです。

質問者 13期は始めから士官待遇ですか。

奥野 そうです。

質問者 陸の場合は特別操縦見習士官

と同じ年代の者は幹部候補生9期として航空士官になっていきますが、海軍でも大学を出て、一般兵になった。

奥野 それは予備学生に合格しなかった学徒兵のことです。14期あるいは4期相当の学徒達です。

質問者 わかりました。

司会 それでは次、荒井さんどうぞ。

荒井 私は甲飛13期で、先程の河崎さん、多賀谷さんと同期です。昭和18年

12月、土浦で海軍軍人となり、その後土浦海軍航空隊に移り、19年8月に、そこを卒業ということになっていまし

た。8月下旬、卒業生全員が集められ、

日本の現状について話を聞かれました。それによると日本の前途は非常に

厳しい。このままでは米軍に負ける。従って奇想天外の新兵器を作って、一

人で相手千人を倒すという形の戦闘をしなければ、日本の勝目は無い。そこで新兵器の操縦員を募集することになっ

た。この集会は秘密の会で、我々の班長は同席せず、副長から直接、話を聞

かされました。

それで、その兵器に搭乗を熱望する者は氏名に二重丸を付けなさい。希望する程度なら〇印で宜しいと言われた

のですが、私を含めて殆どの者が二重丸を付けたと言っておりました。

その中から20名が選抜され、四個部隊に編成され、9月始めに横須賀にある海軍水雷学校へ入校しました。そこで始めて特殊兵器を見ました。奇想天

外の新兵器という話でしたが、いわゆるモーターボートの様なものでした。何か騙されたような感じでした。やっぱり飛行機の方が良かったと思ったのですが、今更、そんなことは言えませ

ん。その日から訓練が始まりました。この兵器は当時マル四と呼ばれてお

りました。特攻隊とか、震洋とか呼ばれてお

りません。秘密兵器であるため、ただマル四です。この艇の頭部に50kgの爆

薬を装着して敵艦に体当たりするという

訓練をしました。当時、横須賀には戦

艦や駆逐艦、空母「信濃」が碇泊して

いましたが、この信濃に向って突撃す

る訓練でした。約二ヶ月の訓練を終え

て、そこを卒業する直前に、連合艦隊

の参謀長草鹿中将閣下がお見えになり、

我々に白鞘(しらすや)の短刀を授け

られました。

卒業と同時に移動のため、列車に乗せられました。秘密部隊だから行先は分かりません。結局、着いた処は佐世保の海兵団でした。更に川棚のマル四訓練基地へ移り、そこでロケット砲の発射訓練を10日ばかりやり、いよいよ基地へ配属です。基地が何処にあるのか分かりません。部隊長も知らない。

船団を組んで佐世保を出港したのですが、船団に故障が発生し、止むを得ず門司に上陸して、しばらく滞在。改めて船団を組んで最終的には台湾の基隆(キールン)に着いたわけです。さらに、基隆を陸路南下、高雄の南にある海口という小さな集落に着きました。

そこが基地となったのですが、兵舎も何もない。まず兵舎造りから、マル四艇の格納庫造りまで、設営部隊と共に自分達の手でやりました。それが20年の3月でした。

一応整いまして、それから夜間訓練をしながら、その基地に駐屯してました。

8月15日、敗戦のことは我々には分かりませんでした。8月20日頃、高雄の警備隊から参謀が来て、日本は負けたということを知られたのです。白鞘の短刀を貰っておりましたので、我々

はここで割腹自殺するより他はないと

いう雰囲気だったのですが、部隊長から軽率な行動をせぬよう諭され、翌年の2月末、輸送船で広島の大竹港に帰って参りました。以上です。

司会 それでは海老澤さんどうぞ。海老澤 私は新設特攻隊、最後の特攻隊と言われた伏龍隊の隊員でした。20年6月1日、その辞令を頂きました。

海軍では時既に、艦船もなく重油も無いという状況でしたが、魚雷艇だけが何故か増産されていきました。我々は久里浜に勤務していた関係上、横須賀警備隊付の新設特攻隊だるう位に思っておりましたら、「爆雷を抱いて敵の上陸用船艇LSTに突っ込め」と言われました。ただそれだけのことでした。

陸軍から前々、「敵の船は一隻たりとも上陸させるな」という要請がありました。

海軍では最高責任者たる者、艦長は沈没する船と運命を共にするという、不文律の掟に縛られていた、艦と共に戦没された方は多数おられます。

海軍ではもちはもちやで然るべき学校で教育を受けないと下士官は一人前に扱って貰えません。プロですから、航海科勤務者は航海学校、鉄砲を扱う者は砲術学校、魚雷を扱う兵は水雷学校、機関科の兵は工機学校とこれらの専門の学校を出た人達に配置が与えら

れるわけです。私も対潜学校、機雷学校、つまり爆雷と掃海の専門学校を出ておりましたので「爆雷を抱いて、LSTにぶつかる要員だな」と思って辞令を貰いました。艦もない、何も無い時代でしたが、私の所属した伏龍隊には多数の下士官の軍人がいました。

甲飛13期は「回天」、14期は「震洋」に、そして15期は「伏龍」に配置、

名が回されたんです。飛行機には乗りたいが、乗る飛行機がない、飛行機の生産も月に100機か200機程度しかないわけだ。殆どの航空兵は伏龍隊に回されて、しかも潜る訓練をしなければならぬ、潜るのは工作学校でしか教育してない、従って潜る訓練を最低一ヶ月やらないと一人前にはなれない。

水中における自由な行動及び捧機雷操作潜水に習熟させるため軟式潜水具をフル回転させ実施したが何分にも兵器の不足で十分な訓練ができず、戦さには間に合わなかった、幻の特攻隊というわけです。私の経歴は以上です。

司会 何か質問は、なければ飯野さんどうぞ。

飯野 では一寸発言します。海軍側出席予定者の中で、杉田さんと小灘さんのお二人が欠席です。杉田さんは今泉さんと同様な経歴ですが、今日は霞が

浦の予科練資料館の起工式に出ておられるそうです。手紙を一週間ほど前に頂きました。それから小灘さんは私と同期です。二ヶ月前、川上さんという方と一緒にアメリカ、エジプト、カイロを回る旅をされたそうですが、帰国後、精密検査を受けたら肺に異常が発見されて手術を受けられました。予後は宜しいそうですが、大事をとって今日は欠席ということですが、

予後は宜しいそうですが、大事をとって今日は欠席ということですが、

予後は宜しいそうですが、大事をとって今日は欠席ということですが、

予後は宜しいそうですが、大事をとって今日は欠席ということですが、

予後は宜しいそうですが、大事をとって今日は欠席ということですが、



川南護国神社例祭

田中 賢一

宮崎県児湯郡川南町にあるこの神社には、地元の出身の英霊六三四柱のほか皆てここに基地のあった陸軍空挺部隊の戦死者二万有余名が祀られており、その中には多数の特攻戦死者が含まれている。

神社創設の由来

内地にある挺進部隊を統括しているのは陸軍挺進練習部で、川南村豊原にあったその営内には、挺進部隊全戦死者を祀る「挺進神社」があった。終戦後その兵舎は宮崎市内で戦災に遭った師範学校が一時使っていたが、神社のお守りは学校が引受けると言うので、お任せしてあった。

ところが宮崎に進駐してきた米軍が突然現れ神社を焼き払ってしまった。行方を失った英霊は、夜体操衣袴姿で寄宿舎の周囲を走り回るとカラッパの音がするとか、寄宿舎の生徒がうなされる」と新聞記事に出た。

第一挺進団長だった中村大佐は当時まだ村内に寄留していたが、神社が焼き払われた直後釘等金物を拾い集め、これを御神体として自宅にお祀りしたが、家は雨露を辛うじてしのぐ茅屋だった。

た。村内の素封家石川富士之助翁は兼ねて自宅の仏壇を改修し御神体を祀り懇ろに供養したところ、いつしか幽霊騒ぎもおさまった。石川翁の次男も戦死しており、村の遺族会長でもあった。

それより先、村の中心地に戦死者を祀る霊堂があったが、終戦直後の台風で倒壊しそのままになっていた。村内に残っていた挺進部隊の復員者は、中村大佐を中心に霊堂再建を村の有力者に説いて回ったが、進駐軍を恐れてなかなか実現しなかった。

昭和二十四年になって進駐軍の強行姿勢も和らいだとして、霊堂の再建が実現し、挺進部隊の全戦死者も地元の英霊と共に安住の地を得ることになった。更に我が国が独立を回復した昭和二十七年になって、町（その頃は町になっていない）の遺族会が霊堂を本殿としその前に拜殿を造り鳥居も建て、川南護国神社とした。この時の遺族会長は富士之助翁の息子の石川博愛氏だった。

川南町では毎年十一月二十三日に町長が祭主となって例祭を行っている。御祭神の絶対多数が挺進部隊の戦死者なので、嘗ては戦友が百人以上参加したが今は二〇人程になってしまった。

この例祭の特色

○町を挙げてのお祭で、各小学校区ごとに受付が設けられていて大勢の町民が参加し、屋台店も出て祭を盛り上げている。

○毎年中学校女生徒による神楽が奉納される。

○国旗掲揚は都城の自衛隊員が行っている。

○以前我々が奉納した挺進各部隊の活躍を描いた油絵十七点と、地元出身英霊を回想する百号の油絵が境内に展示される。

○近辺の商店街は奉祝の轡を立てている。



神楽奉納



神社入口の道路



地元出身英霊を偲ぶ画

(挺進部隊戦友代表として私が捧げた一文)

空挺部隊の御祭神に捧ぐ

鳥兎匆匆諸霊と幽明を訣ちしより やがて六十歳に垂んとす 臉に浮かぶ諸霊は 明眸皓齒 匂うが如き若武者なるに 我等既に人生の黄昏 杖曳きてここに集い み前に額突く

唐瀬原降下場に 真白き花咲かせし若き日のことども 昨日の如き思いあるも相携え練武に励みし友垣の多くが 戦の庭に散華せしことに思い致せば 痛恨の念極まりなし 我等諸霊と志に異なることなかりしも 一つは護国の神となり 一つは八十路の坂に老醜をさらす

戦後価値観の変転驚くばかりにして 我等諸霊と共に抱きし殉国の念 今や地に力及ばざるも 祖国の前途転た寒心に堪えざるものあり 我等微力にして世論教導掉尾の力を尽くさんとす 戦友による英霊の祭祀はやがて絶ゆるも ここ川南の地にありては護国神社の祭礼は永続し この地の人々の心は変りなし 御心安く神鎮まり給え

地元御出身の御祭神に申し上げ 山紫水明の地 人の心純粹なれば 郷土の守りとして永遠に鎮座し給え 茲に御祭神の遺詠に応え 我が腰折れを捧ぐ

レイテ空挺作戦に出撃の際 挺進第三聯隊の宿舎に書きのこされた歌

花負いて空撃ち征かん雲染めん

屍悔いなく吾ら散るなり

(返歌)

身はたとえレイテの土と朽ちるとも

名は高千穂と世にかおるらん

レイテに向かい飛行中桂大尉が書き残した歌

あらわさん時は来にけり千早や振る

神に仕えし太刀のほまれを

(返歌)

ブラウエンあま下りしていかなりや

伝うる人のなきぞ悲しき

義烈空挺隊隊員の遺詠は何首も遺されているが その中の一首 関三郎重曹のもの

よしや身は千々に散るとも来る春に

また咲き出でん靖国の宮

(返歌)

敷島の大和心と咲き薫る

君が心に違ふことなく

川南護国神社の例祭に参じ

空挺部隊御祭神に捧ぐ

日向路の唐瀬の原に花咲きし わが友垣の籠もるひもろぎ

ひもろぎ 神籬

碑つきの節面白く歌いたる

君に応えむ柏手の音

亡き友も団居に入れや今宵なれ

君が好みしからいもの酒

地元御出身の英霊に捧ぐ

うぶすなのみ霊在ますかまほろばの

昔ながらに木々色づきぬ

うぶすな 産土 まほろば 麗しい里

社の銀杏色鮮やかなれば

御祭神で特攻出撃した人々

義烈空挺隊が特攻隊であることは誰も承知しているが、それ以外に初めから特攻として出撃した部隊や人々があることは、あまり認識されていない。レイテ空挺作戦にあたり、四航空から第二挺進団に示された目標は、ブラウエン地区の三つの飛行場だった。十

四方面軍の計画ではそこ迄は山越えの二十六師団が進出できることが前提になっており、提携確実と思っていた。

その頃レイテに向かう船団が次々と敵の航空攻撃で撃沈され、敵航空基地はブラウエンではなくタクロバンやドラグであることが判明してきた。そこでレイテ湾沿いのこの飛行場も降下目標にすべきたという意見が、挺進団の大隊長連中から出てきた。そこで四航空に意見具申し、この二目標が加えられた。地上部隊と提携出来る見込みは初めから無かった。

これに向かう部隊は特攻隊として選出された。ドラグには四聯隊の宮田中隊が降下、三聯隊の竹本小隊が着陸、タクロバンには四聯隊の榊原大尉の一個小隊が降下、三聯隊の佐藤中尉の小隊が着陸という部署だった。宮田中隊は建制の部隊だが他は特攻隊として人選された。降下部隊を運ぶ飛行隊は挺進飛行第二戦隊の三浦中隊、強行着陸は第七十四戦隊と九十五戦隊から差出された重爆各二機だった。出発にあたり飛行隊の三浦中隊長は目標地域の対空火力の激しいことを知り、降下は不可能と判断し全機着陸と指示した。見送った四航空の参謀は全員特攻隊であると明言し、恩賜の酒を注いだという。結果は全機未帰還、海中に撃墜されるほか、一名の生存者も無く戦果は不明である。

水戸つばさの塔慰靈祭

田中一郎衛門

10月6日11時30分より

ひたちなか市新光町運動公園

水戸つばさの塔奉賛会

この慰靈祭は常陸教導飛行師団並びに水戸飛行場関係戦没者九五六柱及び奉賛会物故者一一四柱併せて一〇七〇柱を対象に毎年行われている。

慰靈碑建立から携わった地元在住の木村栄作氏(航士56期)は六年前に、梶山浄六氏(陸士59期)も一昨年他界されたが、この地域在住の奉賛会等関係者の尽力で盛大厳粛に行われた。中央航空クラブによる追悼飛行も上空より参加し、陸上自衛隊施設学校音楽隊の演奏するなか、衆参議員、ひたちなか市長、同市議会議長をはじめ地元有力者、全国から戦没者遺族、戦友も多数参加された。遺族代表として毎年挨拶される姫路市の福井寛治氏が高齢のためか欠席されたことは寂しかった。参列者は一〇〇名を超えていた。

水戸つばさの塔関係戦没者慰靈碑に因んで

「常陸の思い出」

航士56期 林 安仁

大正12年に生を受けてより、早や八十年近くなりました。この人生で、私が一番充実し、悔いのない鮮明な思い出を有する常陸飛行場の僅か一年間が、走馬燈のように蘇ります。(中略)

昭和19年中頃いよいよ戦況不利となり、本部より旅順攻撃の際の白樺隊の古事戦訓が挙げられ「貴官の決心は如何？」との問合せあり。「一同全員白樺隊を決意し決行す」と返事を提出し、逐次特攻隊が下命され、先ず栗原中尉、次いで敦賀中尉そして小沢中尉が拜命、また花蓮港第17戦隊へ転出した平井中尉は、4月1日慶良間列島に突入し多大の戦果を挙げられました。更に四宮中尉は「震天特攻隊」としてB-29に体当りをし、飛燕の左翼端を折損しながら、これを撃墜して自らは生還、2月2日に編成された第19振武隊の隊長に任命され、4月29日に沖繩西方洋上の敵艦船群に突入して多人の戦果を挙げました。(以下略)



「第五十六振武隊のこと」
常陸教導飛行師団特攻記録「天と海」

及び靖部隊メモによると隊員は常陸飛行場で特攻訓練を錬成し、20年4月14日編成を完結し、編成の翌日バスで調布に移動、調布飛行場で三式戦・十二機の整備と訓練を行い、5月3日知覧飛行場に前進した。5月6日、隊長池田元威少尉(航士57期)金子範夫少尉・小山信介少尉・四家稔少尉(いずれも特操2期)の四名は、知覧を〇五三〇発進、沖繩周辺洋上の敵艦船に突入した。このほか、知覧からほぼ同時刻に出撃して突入したのは、第49、第51、第55振武隊の七名であった。

5月11日、第七次航空総攻撃にあたり、朝倉豊少尉・上原良司少尉・京谷英治少尉(いずれも特操2期)ら三名は、同じ三式戦の第55振武隊の黒木少尉・森少尉らと編隊を組み、知覧を〇六〇五発進、沖繩周辺洋上の敵艦船群に突入した。この日の突入は十二隊、計三十六名であった。

6月11日、悪天候下、川路晃少尉(特操2期)は他隊の三名とともに知覧を朝のうち発進し、沖繩周辺洋上の敵艦船群に突入した。この日、万世基地からも第64振武隊の九名が突入した。5月11日の日本軍特攻の様相をドキュメント「神風」(デニス・ウォーナー、ベギー・ウォーナー共著、妹尾作太郎訳)に次のように書いている。

この日のわが陸海軍特攻機及び桜花の攻撃により大損害をこうむり、戦争終結まで戦列に復帰し得なかった米軍艦は、空母バンカー・ヒル(当時ミッドチャー提督座乗)、駆逐艦エバンズ、同ヒュー・Wハドリの三隻であり、この他にも発表されない小艦艇や輸送船もあったのではないかと思われるが、バンカー・ヒルは大火災を起こし沈没はまめがれたが、乗組員の戦死三五三名、行方不明四十三名に達した。また駆逐艦ハドリは浸水と火災のため傾斜し、危うく沈没するところであった。戦死二十八名、艦長を含む六十七名が負傷した。

5月25日、前日の24日夜、義烈空挺隊の強行着陸、斬り込みが行われたのに呼応し、小沢幸夫少尉・鈴木重幸少尉(いずれも特操2期)の二名は、知覧を早朝発進し沖繩周辺洋上の敵艦船に突入した。(小沢少尉は與論島上空でグラマンと交戦した)この日の突入者は第62戦隊(四式重一さくら弾)を含め十九隊、計七十名にのぼった。

駆逐艦エバンズは、午前七時五十分頃から特攻機の攻撃を受けた。エバンズは味方の戦闘空中哨戒隊の支援を得て高速運動をとることににより特攻機の攻撃をかわしたが、特攻機は協同攻撃態勢をとって二方向からあるいは三方

第五十六振武隊

(1)機種・機数 三式戦・十二機
 (2)編成完結日 昭和二十年四月十四日、(靖部隊メモによる)
 (3)隊員名簿

階級	氏名	出身期	突入	場所等	本籍地
少尉	池田 元威	航士57	20.5.6	知覧(五)五発進 沖繩周辺洋上、 突入	大阪市
少尉	金子 範夫		20.5.6	同	突入 東京都
少尉	小山 信介		20.5.6	同	突入 神奈川県
少尉	四家 稔		20.5.6	同	突入 いわき市
少尉	上原 良司		20.5.11	知覧(六)五発進 沖繩周辺洋上、 突入	長野県
少尉	朝倉 豊		20.5.11	同	突入 茨城県
少尉	京谷 英治		20.5.11	同	突入 箕面市
少尉	小沢 幸夫		20.5.25	知覧(五)五発進 沖繩周辺洋上、 突入	四日市市
少尉	鈴木 重幸		20.5.25	同	突入 館山市
少尉	川路 晃		20.6.11	知覧発進(朝?) 沖繩周辺洋上、 突入	東京都
少尉	三根 耕造		20.5.17	5・16試験飛行中 不時着重傷、 5・17戦傷死	東京都
少尉	橋本 良男		20.5.17	調布で不時着負傷 して入院、 つら常陸付	(現森川 誠秀氏)



常陸・本部前にて

- 川路少尉
- 四家少尉
- 鈴木少尉
- 金子少尉
- 京谷少尉
- 上原少尉
- 三根少尉
- 小山少尉
- 朝倉少尉
- 小沢少尉
- 池田少尉

向から同時に突進してきた。エバンスに最初に突入に成功したのは「彗星」であり、その直後、三式戦「飛燕」が突進中エバンスの主砲弾を浴びて海中に墜落した。二分後、三番目の特攻機が猛烈な速度で突進して来て後甲板にがむしゃらに突っこみ……(中略)このエバンスも大損害を受けて航行不能となり、戦死行方不明二十名を越えた。と記されているので、朝倉少尉らの第56振武隊の二名は、このエバンスに突入したものと推察される。

根拠資料

「常陸教導飛行師団記録」

「天と海」

「水戸つばさの塔奉賛会公誌 第二六号」



常陸飛行師団の2式複戦

特操頭彰の碑々前祭

田中一郎衛門

11月9日14時より

江戸川区東小岩星住山善養寺

特操頭彰の会

さきの大戦で特操がいかに戦ったか、特操とは何たるかとその功績を顕彰して後世に遺すべく、当星住山善養寺住職であった故名取盛雄大僧正(特操4期)を中心として建立した「特操頭彰の碑」祭は例年十万人を超える当山の影向菊花会の催す菊花展の賑わう休日に遺族・特操各期代表も参列し、名取和弘住職の読経により碑前法要が行われた。焼香は全員が一斉にシャボン玉を空に飛ばし閉会した。参列者は約一〇〇人に及んだ。

碑文

第二次世界大戦末期の昭和十八年(一九四三)七月、当時帝國陸軍は「陸軍特別操縦見習士官」(特操)制度をつくり、高等専門学校以上の学生に対し入隊時から見習士官の待遇を与え、航空機操縦を中心とする航空将校の短期養成により戦局の挽回を図ろうとした。祖国の危機に奮起して、これに応じた学徒は一期から四期まで七千余名に及んだ。

激しい訓練を経て実戦に参加し、とくに特攻作戦に当たっては、その主力となつて南海に散華した者も多い。

爾来星霜ここに五十年。今や世人特操の何たるかを全く知らず、生存する同志も既に古希を迎えた。時恰も特操の同期生でもある現善養寺住職 名取盛雄大僧正の発意があり、有志相諮つて之に協賛の上、ここ天下の名松をのぞむ地に「特操頭彰の碑」を建立し、

戦死あるいは戦後物故された諸霊の遺徳を偲ぶとともに、過ぎし日の青春の熱誠を追懐するよすがとするものである。

当山第三十五世大僧正 名取盛雄
平成五年(一九九三)十一月 発願建立

特操関係

特操の採用 一期二五〇〇人は18年

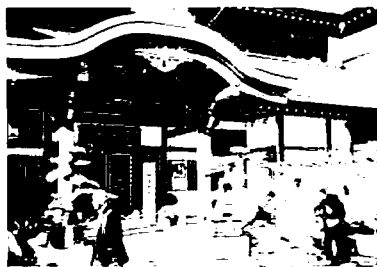
10月入隊、その内訳は9月に繰り上げ卒業した学生出身者及び予備士官学校・一般兵科から転科した者。二期二二〇〇人は18年12月学窓から初年兵として入営し、翌19年2月志願により採用された者。三期三二〇〇人は19年4月入隊した。そのうち一五〇〇人は二期と同時に初年兵として入営したが、教育施設の關係から予備士官学校を経て入隊した者と、一六〇〇人は学窓から入

隊した者。四期一〇〇〇人は同年6月と8月に分かれ、いずれも学窓から入隊した者である。一期から四期迄の採用は僅か八ヶ月一ヶ月という短期間であった。

特操の戦没者 18年10月に入隊した一期生は訓練を始めて十三ヶ月目にあたる19年11月には比島で四一名が特攻で散華され、その後沖繩等を含め戦没者七〇一人のうち特攻が二二二人であり、二期は19年4月中練の訓練を開始し、20年5月沖繩特攻で七六人を含む一三九人が戦没されました。奇しくも両期とも十三ヶ月目に第一陣が出撃しております。三・四期を併せると戦没者八九五人、うち特攻三一三人が散華された。

京都護国神社特操之碑 戦後私共は英霊の遺志を継承し戦友会を結成し、

その後、昭和44年浄財を集め京都護国神社に「特操之碑」を建立し、戦没者全員の氏名を刻し、隔年に頌徳祭を催し慰霊頭彰につとめてきた。昨年特操会として各期からの永代供養料を奉納し、明十五年の第17回頌徳祭を最後に特操会としての催事を終了し、じ後は指定する日時に毎年近畿特操会が中心となり碑前祭を継続することになった。遊就館の展示 本年初頭靖国神社遊





遊就館に奉納した特操の像



就館から戦没者の遺影を一括奉納されれば同一箇所に展示して頂けるといふ吉報に恵まれ、一期生会はこの遺族に連絡をとり遺影を収集し、二期は各会幹事の協力により殆ど全員に近い一三五柱の遺影を集め、一期生会と共に神社側に奉納し展示して頂いた。

一期生会は別に拠出金を集め、京都護国神社「特操之碑」を設計した吉原氏の協力により、これを再現し、側面には「特操の戦史」各期ごとの戦没者の氏名を刻した「銘牌」を配した等身大の立像を10月2日各期代表により遊就館に奉納した。

マバラカットの神風慰靈平和祈念式典に参列して

菅原 道熙

平成14年10月25日午前7時10分から、元米軍クラーク基地内のリリー・ヒル(Lily Hill)、自昭和19年12月5日至昭和20年9月20日の間、建武集団(陸海一体)の司令部所在地)で、鹿児島県の名刹最福寺の池口恵観住職が寄進した、高さ4米の観音立像の除幕式が行われた。この日は5年前に大僧正の示唆によって、クラーク・マバラカット両市が世界平和都市宣言を行った五周年記念日である。

平成10年10月25日、マバラカット市の神風慰靈祭に同郷の徳田虎雄代議士(自由連合代表)と共に参列した住職は、この様な行事が行われるに至った経緯を知って、深い感銘を受けて観音像の寄進を思い立ち、徳田代議士は神風特攻の史実を風化させてはならずと、以来毎年徳洲会会員を引率して(今年125名)慰靈祭に参列する様になっている。代議士は将来は300名位にしたいとの抱負を最上理事長に述べておられた。

除幕式は比空軍音楽隊の奏でる比・日両国歌に始った。最上理事長を加えた9人の手に依って観音像は除幕され、



観音像除幕法要 (於リリー・ヒル)

雲一つない青空、輝く朝日に映えて観音像の美しいお姿が現われた。

両市長、徳田代議士に続いて最上理事長の挨拶があり、関大尉以下の敷島隊が離陸した7時25分に、軍楽隊が「海行かば」の演奏を始めた。日本人参列者の中から高らかに大合唱が湧上らなかったことは、大変残念なことであった。

最後に所用があつて不参の池口住職に替って、熊本県荒尾市の正法寺、赤星善弘住職以下5人の僧侶によって、読経が行われて除幕法要は終わった。

続いて同じ基地内にあるマバラカット西飛行場跡に移動した。この飛行場からは10月21日に敷島隊が出撃したが、敵機動部隊が発見出来ずに掃射している。この史実を伝える説明板には、大西長官以下に見送られて乗機に向う隊員を写した写真も添えられている。こ

の説明板は、この日早朝に設置されたものである。

当時の掩体壕が幾つも手付かずの周辺環境と共に残っていて、遠くにマニラ周辺基地から飛立った陸海のバイロケットが目撃された、アラヤットの独立峰が望まれて、往時を偲んで感慨一入なるものがあつた。

説明板を前に献花・読経後、更に車を連らねてマバラカット市東飛行場跡に移動した。日比両国旗を手にした小学生の一人が我々を迎えて呉れた。

ここは当時16才のダニエル・H・テイソンさんが、有志を相募って昭和49年に慰靈碑を建立したことは、当協会発行の「特別攻撃隊」38頁の写真と説明に尽きるが、平成3年のピナツポ火山の噴火によって、碑は3米余積った火山灰に完全に埋もれてしまった。市

は同じ場所に新たに碑を建て直すことにして漸く一期工事が終了した処である。両国旗をあしらった正面の壁前に、特攻勇士の像を建て、右側にはもう一つ直角に壁(壁画)を作る構想とこのとであるが、資金難から完成の目途はついていない。

壁前で5人の僧侶が読経。その背後には鳥居が厳然と立っており、神仏混濁と言ふべきであろうか。大西長官の副官であつた門司親徳氏

の挨拶文が、中村浩二氏によって読み上げられた。氏は池口住職と徳田代議士が初来訪された前年にこの地を訪れて、一連の動きを知りそれ以来献身的に奉仕活動を続けておられる、戦後生れの奇特の士である。

マバラカットの観光局長、エドガー・ヒルペロ氏は神風特攻隊の熱心な敬仰者で、この日は日本海軍パイロット姿でリリー・ヒルで日本語で挨拶をされた。

今日のマバラカット神風慰霊式典があるのは、一に掛けて高年のデザイン、若いヒルベルト両氏の熱意と努力の賜である。日本人を頼ることなく、二度に亘って慰霊碑が建立され、年々式典が続けられていることには、只々頭が下るのみである。

そこからそう遠くないバンバン地区には、大西長官の司令部壕が残されていて、壕の近くに記念碑が建てられている。神社らしい施設は何もないが、大西神社 (Shrine) という案内板が立っていた。

司令部壕は更に整備されて、東飛行場跡を含めたこの地区一帯を公園化して、永く神風特攻隊の偉業を伝えて行くことになるという。色々と考えさせられることの多い一日であった。



日比両国旗をあしらった正面壁碑



マバラカット東飛行場跡慰霊碑



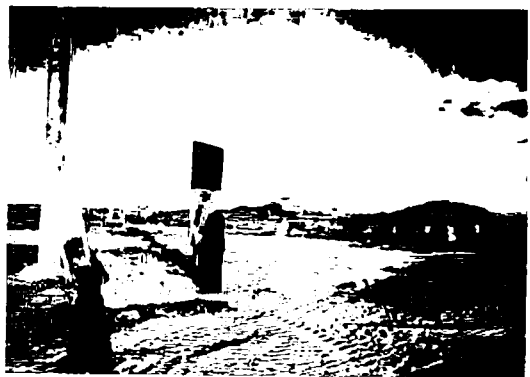
正面壁碑前での読経



鳥居の向って右側にある説明板



残された掩体壕 (西飛行場跡)



西飛行場跡からアラヤット山を望む新説明板は未完成(10月24日夕)

平成14年度回天烈士ならびに回天 搭載戦没潜水艦乗務員追悼式参列報告

評議員 小灘 利春

航空自衛隊防府基地の
第12飛行教育団の四機、
海自岩国基地第31航空
群の飛行艇三機の各編

回天発祥の地、徳山市大津島において昭和30年以来連綿と続けられてきた回天戦没者慰霊の式典が、地元有志の団体である「回天顕彰会」の主催により平成14年11月10日13時半から献花方式の「回天烈士ならびに回天搭載戦没潜水艦乗務員追悼式」の形で開催された。前日までの寒波から一転して晴れ上がった秋空のもと、三百人余りが参列し例年どおり厳粛な式典が進行した。

回天の初出撃から五八年もの歳月が経つが、北海道から九州の各地より50名を越えるご遺族が参加された。しかも戦没者のご兄弟などで初めて参加される高齢のご遺族が数多くあったことは肉親の絆がやはり強いことを偲ばせる。

山口県、徳山市、県議会、市議会、諸官庁団体の方々が参列、自衛隊関係では県地方総監部ほか近在の各部隊の代表者が参列された。潜水艦「おきしお」がその昔、回天搭載潜水艦が出撃を前に雄姿を浮かべた基地沖合いに碇泊、制服姿の乗員が回天碑前の式場に整列した。

海上自衛隊の小月教育航空群の三機、



明平成15年度は11月9日の開催になる。

地元の若人がたちが演奏する「大徳山太鼓・回天」もいつもどおり力強く響きわたった。

なお、「回天特攻」が存在したことを知り、研究したいと初めて参加した若い人々が、遠く北海道から沖縄までの各地からあったことは、この国が良い方向に転換しはじめた現れかと期待を覚えた。



天武隊イ47潜

職を辞するにあたり

元事務局局長 木村 元正
平成4年、まだ協会が成立発足する前の年から、昨年末までの10年間、協会の事務局で仕事をさせて頂きましたことを有難いと思ひ、また協会の各種事業にお手伝いさせて頂いたことを誇りに思っております。

この間、いろいろな方々との出会いもありました。それらは、何れも私の貴重な財産と言えます。これからは一評議員として微力を尽したいと願っております。

皆様 有難うございました。
協会のご降昌をお祈り致します。

平成14年12月27日

故・飯野伴七理事を偲ぶ

評議員 小灘 利春

財団理事の飯野伴七兄は本年八月初旬、鎌倉の病院に突然入院した。市内に住む私が直ぐに見舞いに行ったところ「夏風邪が一向に治らないので入院した。秋分の日世田谷観音の法要には出席するが、目先の会合は無理だ」というので、私が代行していくつかの会合の欠席通知をした。いつも通りの元気であり、直ぐ治るように思った。しかし急性肺炎になり、八月十七日横浜市内の病院へ転院したが、二十三日に見舞った同期生の話でも至極元気で、昔の歌をいくつか一緒に歌ったという。それで安心していたところ、意外にも病状急変して九月三日、多臓器不全で世を去った。

飯野兄が本財団の評議員になったのは平成七年である。他の方々よりもかなり遅い参加であるが、それには次のような経緯があった。

財団の前身「特攻隊慰霊顕彰会」は昭和五十三年に発足、特攻に参加した陸海軍各部隊の団体に呼びかけ、海軍の関係各会も水交々々長の強力な斡旋があつて次々と加入した。顕彰会は平成五年に財団法人「特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会」に発展し翌春、千鳥が淵戦没者墓苑で財団として最初の慰霊祭を開催する運びとなった。

しかしそれに至る間、海軍の航空関係者が会合、諸行事に顔を見せなくなり、やがて欠席が固定化した。海軍側は各部隊、出身別、期別、地域別などで多様な団体を早くから結成し、それが戦友たちの慰霊行事を以前から続けていた。回天関係では、元搭乗員たちが戦後十年の昭和三十年に始まり毎年、最初に敵艦隊に突入した記念日に回天発祥の地、徳山沖の大津島に集まって慰霊祭を行っており、これが拡がって地元有志の顕彰団体に引き継がれ、敬肅な慰霊行事が途切れることなく今日に続いている。同様な状況で、海軍の関係者にとっては屋上屋を重ねる感じは否めなかった。特に航空関係にその感が強く、いつしか遠のいたものと思われる。

大規模な特攻作戦を最初に実行したのは海軍の航空機特攻「神風」であり、且つ最も多く特攻戦没者を出している。従つて当然に特攻の代表となるべき神風の関係者が参加しないのでは、日本全体の特攻戦没者を慰霊する団体として形を成さないのので、前理事長とたびたび相談したが、この問題は早急には解決しなかった。それで私は財団第一

回の慰霊祭のあと、戦闘機乗りであった同期生の飯野伴七兄に会つてこの事情を説明し、財団への参加を求めた。

彼はそれまでの海軍航空側の経過、空気を承知していたが「よし、判った。俺が出よう。周囲の了解を取り付ける」と快諾し、零戦搭乗員会をはじめ関連諸団体を説得してこの財団に評議員として参加してくれたのである。後に理事に就任した。

海軍兵学校第七二期出身の彼は戦闘機乗りとなり、昭和十九年七月以降は上海航空隊にあって「零戦」と局地戦闘機「雷電」を操縦して来襲するB-29、P-51や艦載機を迎撃していた。雷電を駆つて離陸中に発動機停止、黄浦江に不時着水した経験もある。当時、零戦搭乗員たちは各基地から次々と南九州に集まり特攻へ発進していたが、彼には特攻に直接参加する機会がなかった。因みにわれわれ兵学校七二期は二

階級特進が最も多いクラスである。神風特攻四十名のほか回天、震洋など各特攻部隊の最初の時期から多くが隊長、あるいは先任搭乗員として出撃、散華した。

飯野兄は以前から戦没した戦友の墓参や慰霊の集会に出席するため全国を回っており、評議員となつてのちは財

団の航空関連行事の世話には特に熱心であった。同期生が隊長であった第一御橋隊の慰霊祭に彼はたびたび参加してきたが、財団がその隊のビデオを作成したときは参画の上、クラス会などで周知、販売につとめていた。また編集委員として特攻隊遺詠集などの編集に当たっている。

本年五月の沖繩慰霊巡拝旅行にも参加した。慶良間水域は海陸特攻機が集中して艦船攻撃をかけ戦果を挙げた場所であるが、白波が立つその海面に於ける慰霊祭は彼にとっては最たる式典であつたと思われる。

さらに彼は横浜を中心とする旧海軍関係親睦団体の「水交々みなと会」の会長として奉仕し、最近はその海上自衛隊OBの会と合同した「湘南水交会」の名誉会長に就任していた。九月六日の彼の告別式に制服の海上自衛官の姿が多数見られたのはそのためである。

飯野兄は性格が明朗、積極的であり、何人とも、また何事にも気軽に取り組んでいった。胃全摘の病歴があるにもかかわらず至つて元気で、酒も良く飲んでいた。財団にとって貴重な人物であつたが、彼の奉仕を引き継いで私も努めたいと考える。

敵艦に突入し氏名が判明した神風特攻隊員

02.10.8

小滝 利春

(1) ミズーリ突入

昭和20年4月11日馬喜界島南方で戦艦ミズーリ (USS Missouri, BB-63) の右舷後部に突入した特攻機は機体の型式および突入時刻が、下記石野少尉、または石井少尉と判定される。

神風特別攻撃隊神雷部隊第五建武隊 (隊長矢口重寿中尉) の零戦五二丙型16機が同日那覇屋基地より発進し13機が突入した。

その第四班より「幽敵見ユ」「幽敵機発見」と打電。(突入発信はない) ミズーリの日誌には「幽二機目接近」と記録されている。他の同日出撃した各隊各機は幽一機の間に別の海域で突入を終えていた。

①石野節雄 二等飛行兵曹(当時)

乙(特)飛 19歳 岡山県和気町 没後少尉 四班第4番機

②石井兼吉 二等飛行兵曹(当時)

22歳 千葉県松戸市 没後少尉 四班第3番機

ミズーリ艦長ウィリアム・キアラハ

ン大佐は翌日、乗員大半の反対を押切り、ただ1人の遺体に対して水葬礼をおこなった。

その五六年後の平成13年4月12日、

真珠湾ミズーリ艦上の神風機突入の損傷が残る後甲板で、第五建武隊遺族および米海軍軍人のキアラハン艦長長男ほか日米双方が参列し、儀仗兵が弔銃を発射して追悼式が施行された。

調査者① エドウィン・カワハラ氏 (ハワイ在住二世)

② 佐藤健輔氏(ハワイ在住)

③ 可知 晃氏 (藤沢市在住)

ミズーリに特攻機が超低空で接近し命中、白煙次いで爆発の黒煙があがる光景を撮影した16ミリフィルムが残っている。

この経緯を、HKGが「神風特攻隊・ミズーリ突入の軌跡」として平成13年8月3日衛星第一放送で放映した。

(2) 駆逐艦キッド突入

上記と同じ日「幽突入す」と打電した第五建武隊隊長矢口重寿中尉であることは米側記録と合致することから略確実。第13期飛行予備士官。没後少佐。500キロ爆弾を携行して米国駆逐艦キッド (USS Kidd DD-611) の右舷に突入し、艦内で爆発したために損害甚大。修理不可能。乗員38名戦死、57名負傷。

調査者 平義克己氏 (在加州サンディエゴ)

(3) 空母バンカーヒル突入

昭和20年5月21日、沖縄周辺で第五八機動部隊旗艦の空母バンカーヒル (USS Bunker Hill CV-17) を攻撃した零戦五二型の1機目は飛行甲板に突入、次いで2機目が爆弾を飛行甲板に投下したのち艦橋の搭乗員待機室に突入、航空機乗員45名が即死した。同艦ではこの二機の突入により司令部僚ほか392名が戦死行方不明、負傷29名。搭乗機は殆どが破壊された。同艦は終戦後まで修復できなかった。

2機目の操縦者の氏名が種々の遺品特に救命胸衣背中の名札から第七昭和隊小川清少尉と判明した。海軍第14期飛行予備学生出身、没後大尉。

同艦はこれほどの大損害を被りながら、日本の操縦者の遺体を多数の戦没乗員とともに水葬礼をもって送った。

調査者 グレース・美幸氏 (在サンフランシスコ)

小川少尉の遺品は平成13年3月遺族に返還され、この件が5月24日日本テレビにより放映された。

(4) 空母バンカーヒル突入②

上記と同じ日、空母「バンカーヒル」に突入した第1機目は陸上爆撃機「銀河」であった。飛行機の残骸から発見された手紙は同日朝に書かれたもので、「宮崎にて」とあり「勲」と署名があった。

米国海軍研究所のアナポリス史料館でこの手紙を別人の松屋勲少尉と見做して展示していたが、同少尉はその前年10月27日レイテ湾で既に特攻戦死している。沖縄周辺が5月11日突入した「勲」の名前は、同日臨宮崎基地から発進した第9銀河隊の伊東勲1飛曹(乙)飛18期(大分県)だけが該当する。

この銀河に同乗した搭乗員は操縦の松本学1飛曹(甲飛12期、愛媛県)と偵察の山根三男1飛曹(甲飛12期、広島県)であった。没後それぞれ少尉。

この件の調査もやはり上記と同じグレース・美幸さんから始まった。

(5) 空母マニラベイ突入

昭和20年1月5日ルソン島西方で零戦三機が200キロ爆弾を抱いて護衛空母「マニラベイ」(USS Manila Bay CV-61)に超低空で突進した。一機は対空砲火の弾幕で墜落したが、残る二機は肉薄して急上昇、一転急降下して飛行甲板に一機が突入した。後続の一機は突入直前に命中弾を受けたが、機

首が上がってマストに当たり海面に落下した。

突入した零戦は飛行甲板を貫いて爆発、格納庫の飛行機と多数の人員が死傷した。遺品の財布のなかにあった名刺から、その搭乗員の氏名を多くの人が協力して関係者を辿り、兵学校第72期の丸山隆中尉と判明した。遺された日の丸の国旗にも薄く「隆」の字が残っていた。没後少佐。

マバラカット基地を同日陥進した零戦17機の第18金剛隊の一編隊であった。

戦後五十年の終戦の日、これらの遺品が遺族のもとに帰った。マニラベイの応急作業指揮官パーレット大尉(のち大佐)の息子である大学教授が来日して石川県能登半島の七尾に住む遺族に手渡し、墓参した。その教授の息子も来日し、日本女性と結婚している。恩讐を超えたドラマと言えらるであろう。

米軍太平洋艦隊司令長官 (CINCPAC) 日誌

〈1945年4月27日、28日の分〉

訳・全国回天会
(小灘利春 TK)

4月27日

琉球：

- 第二四師団が沖縄本島南部で平定作戦を実施。牧港(マチナト)飛行場の2/3を占領した。伊江島の行政戦術部隊は26日ISCOMに引き継いだ。
- 早朝、日本機5機が西方から接近したが、マーコム〈高速掃海艦〉がその3機を撃墜した。そのあと日中は日本機の攻撃がなかった。

- 夜間、攻撃が2回あった。

第一回は日本機25機が8波で来襲、その8機を撃墜した。

カナダ・ビクトリー〈貨物輸送艦〉が沈没した。

ラルフ・タルボット〈大型駆逐艦〉とラスバーン〈高速輸送艦〉が損傷を被った。

第二回は50機の日本機が20波で攻撃した。艦船の対空砲火で10機を撃墜、陸上の対空砲火で7機を撃墜した。艦船への命中なし。

読谷飛行場に軽微な損害があった。

ハッチنز〈大型駆逐艦〉およびボーズマン・ビクトリー〈貨物輸送艦〉が特攻艇〈SUICIDE BOATS〉により損傷を被った。

- 第58.1任務群は十日間の休養を与えられウルシーに向かった。護衛空母の艦載機が先島群島を制圧した。

九州：

- B 29 110機が九州の下記6箇所の飛行場を空襲した。
国分 17機、都城 14機、鹿屋 21機、串良 16機、出水 21機、宮崎 21機。
視認可能な高度の11,000~16,500フィートから爆撃を実施した。
宮崎では日本機の反撃はなかった。他の場所での反撃は微弱乃至若干といった程度であった。
B 29 2機喪失。

潜水艦：

- 沖縄水域で潜水艦との接触と見られるものが続いている。
リングネス〈高速輸送艦〉は沖縄の南東300哩の地点で潜水艦を撃沈した。小型潜航艇と推定される。

南西太平洋区域 (SWPA) :

- ・ミンダナオの部隊はダバオ湾へ2週以内に進撃した。
B-24が台湾のトシアンとオカヤマを急襲した。
B-24の17機が都合よく目標に命中させた。
B-25の12機が台湾の屏東を攻撃し砂糖工場に命中させた。
B-24の隊が北西ボルネオに派遣された。
ルソン各地での作戦を支援した。
パラオ地区とヤップ島に対して平常どおり出撃した。
PBYPの2機が父島へ夜間のロケット攻撃を行った。

- ・TK注①

マールコム	MACOMB	(DMS-23)	高速掃海艦
カナダ・ビクトリー	CANADA VICTORY	(AKS-)	貨物輸送艦
ラルフ・タルボット	RALF TULBOT	(DD-390)	大型駆逐艦
ラスバーン	RATHBURNE	(APD-25)	高速輸送艦
ハッチンズ	HUTCHINS	(DD-476)	大型駆逐艦
ボーズマン・ビクトリー	BOZEMAN VICTORY	(AKS?-)	貨物輸送艦
リングネス	RINGNESS	(APD-100)	高速輸送艦
PBY	コンソリデーテッド哨戒爆撃機 (双発飛行艇) (カタリナ)		
- ・TK注② カナダ・ビクトリー撃沈を同日伊36潜から発進した回天による戦果と記載する戦史書がいくつかある。しかし同艦の沈没地点26-23N 127-42Eからみて事実上上記のとおり航空攻撃によるものと判断される。
- ・TK注③ ボーズマン・ビクトリーの損傷は公式戦史には「人間魚雷または豆潜水艦」とされている。これも交戦地点26-00N 127-50Eの点から疑わしく、上記記事のとおりマルレ (または震洋) の戦果である可能性が高い。
- ・TK注④ リングネスの報告書によれば4月27日の朝、沖大東島付近で同艦を攻撃し、交戦したものは明らかに回天であって、地点と時刻から天武隊伊36潜から発進した艇と判断される。

4月28日-28日2400現在、要約 (使用時刻 | 時刻帯 = 日本標準時)

- ・海軍部隊の本日の作戦は東と西の地区での艦船の艦砲射撃による第24師団への支援であった。巡洋艦、大型駆逐艦および小艦艇が東西両海岸で「錘叩き」作戦に従事した。他の射撃支援艦艇は航空攻撃に対する防護の配備についた。
- ・本日の砲撃による支援成果は、ニューメキシコ (戦艦) が7570地区の兵舎四棟および洞窟に命中弾を与え、同地区の無線局に数発を命中させた。
兵力の集結を航空攻撃で十分に援護した。
モービル (軽巡) とテネシー (戦艦) は種々の洞窟を破壊したと報告した。
- ・セントルイス (軽巡) とホール (駆逐艦) は西海岸に配置された日本の小型艇を絶滅する計画に従事した。
セントルイスの報告によれば同艦が小型艇9隻、5隻、キャラハン (駆逐艦) は特攻艇 (SUICIDE BOATS) 3隻を那覇湾内で撃沈した。
LCI(G)-347は4月27日から28日にかけての夜間、特攻艇1隻を撃沈した。
LCS-84の報告によれば特攻艇が使う戦術は哨戒艦艇が接近するまでは静止し、そのあと突進して高速で通過するという。

- ・グイン〈大型駆逐艦〉は4月28日0130配備地点B-10において爆弾または魚雷が危うく命中するところであったという。
ラルフ・タルボット〈大型駆逐艦〉は戦死5名、負傷者10名と報告してきた。
トーマスE. フレイザー〈?〉は地点154において28日0415現在陸上攻撃機の襲撃を受けている。同機は爆弾を投下したが、不発であったので同艦には被害はなかった。
サジッタリウス〈?〉は4月28日0300輸送地区で敵飛行機1機を撃墜した。
LCS-63は第105地区で4月28日0415小型艇1隻を撃沈した。
カナダ・ビクトリーの人的損害は、商船乗組員の負傷14名、戦死7名。海軍要員の戦死1名、負傷13名、行方不明1名。陸軍軍人は行方不明1名と報告してきた。

LCI-803は4月28日0330第9232地区で爆弾が至近距離に落下したが負傷者、損傷はなかった。

イングランド〈護衛駆逐艦〉は4月28日2205ボロ地点の真方位340度、距離14浬で特攻機が突入してきたが命中しなかった。
クローター〈護衛駆逐艦〉はボロ地点の北11浬のキラー1の配備地区にいたが、4月27日から28日にかけての夜間、数機の国籍不明機が緊急信号に似た不明瞭な信号を出し、且つ航空灯を点灯していたと報告した。
昨夜、不明瞭な信号を出していた航空機2機をバトラー〈駆逐艦〉が撃墜した。友軍には損害なし。
- ・LCS-37は先に報告した4月28日0240に撃破した特攻艇との交戦の際、爆雷によって操舵軸と艦尾外板に損傷を受けた。
- ・ピンクニー〈輸送艦〉は慶良間付近で警戒配備に就いていたが、低空を飛んできた特攻機が1928艦の中央に命中した。猛烈な火災が艦橋後部から発生し、暫くして消火できたものの艦中部はすっかり焼けてしまった。機関室は満水し、曳船が横付けして排水作業をおこなった。
同艦からの新しい報告によれば、死傷者は自艦で手当てできる者以外は病院船に移した。艦長は負傷し、目下マウント・マッキンレイ〈?〉に移乗している。爆発と火災によって25人が戦死した。
- ・ウイチタ〈重巡洋艦〉は中城湾内で4月27日2351水線下に損傷を被った。潜水夫の調査により、小口径の弾丸が艦の外板を貫通して燃料タンクの中で爆発したことが判明した。破孔の直系は約5インチ、左舷の水面下5フィートであった。恐らく陸上の高角砲の射撃によって損傷を受けたものと思われる。
- ・第51.21任務隊指揮官から第0825地区から第0827地区の間に小型潜航艇らしいもの21隻を発見したとの報告があった。これには破損した潜航艇6隻と実用頭部が付いていない18インチ魚雷(直径45センチ)1本および整備施設が含まれる。
- ・4月28日の機雷掃海作業は海峡と輸送区域の通常の掃海であった。オガン岬の珊瑚礁の東のE-1, E-2, E-4の各地区の掃海は完了した。
水深100尋と10尋の等深線の間H-11地区も終了した。
浮流機雷を第3928地域で1個、第5136地区で1個、それぞれ処分した。
G-1地区で再度掃海作業を実施したが成果はなかった。
エリソン〈大型駆逐艦〉は4月28日1045触角式機雷を北緯26-44 東経128-23の地点で処分した。
- ・4月27-28の夜間戦闘において味方の対空砲火により7隻の艦船で合計18名が負傷したとの報告が本日あった。艦船が対空火器を乱射することは解決しがたい難題である。

- ・米軍航空部隊の本日の活動は第58機動部隊、第52.1任務隊、第99.2任務隊による陸上部隊への直接支援であった。沖縄全土の制空権は見事に保持された。

第52.1任務隊は先島諸島に対する攻撃を継続した。4月27日の攻撃では野原、石垣、宮良の飛行場に命中弾を与え、火災を発生させた。

池間島では小型帆船1隻を炎上させ、5隻に機銃掃射を行った。目標地域で0100から2100まで哨戒飛行を継続した。飛行場の敵側の動きは認められなかった。久米島に対し再び機銃掃射を実施したが反撃はなかった。

慶良間基地からのPBM機、読谷基地からのPB4Y機によって対馬海峡までの索敵飛行を実施し、多数の発見があった。

数隻の小型船舶に対し機銃掃射を行った。4月27日2242北緯33-05 東経122-33の地点で敵輸送船団に対し、PBM 6機が超低空攻撃をおこない4隻に500ポンド爆弾を命中させた。

1101護衛駆逐艦1隻を北緯33-52 東経126-18で発見、また1155北緯34-34 東経120-00で輸送船1隻、小型輸送船1隻、FTC 1隻を発見した。

1220北緯34-43 東経124-28の地点を針路真北で進む多数の小型船で編成した船団を発見した。

特別な飛行隊をトラック諸島に派遣し空襲した。

4月28-29の夜間、爆弾と魚雷を搭載したPB2Y10機が下関海峡を航行する船舶を攻撃した。

沖縄水域でPBMから飛ばしたASPの反応については報告がなかった。

緊急着陸用の飛行場として現在伊江島が使用できる。東側滑走路から3,000フィート北にあり、滑走路の方位045度=225度。

- ・本日の敵の空襲については特別報告書に記載。この報告書に制空部隊による74機を追加し、敵機撃墜数は合計104機になる。

- ・天候 積雲が散在し雲量2/10。上層は積雲と巻雲。東の風8ノット。視界15浬。平均温度73度F。海況 軽波、うねりなし。

・TK注①	ニューメキシコ	NEW MEXICO	BB-40	戦艦
	モービル	MOBILE	CL-63	軽巡
	テネシー	TENNESSEE	BB-43	戦艦
	セント・ルイス	ST. LOUIS	CL-49	軽巡
	ホール	HALL	DD-583	大型駆逐艦
	キャラハン	CALLAGHAN	DD-792	"
	グイン	GWIN	DD-433	"
	ラルフ・タルボット	RALF TALBOT	DD-390	"
	トーマス・フレイザー	THOMAS E. FRASER	?	(大型、駆逐、護衛駆逐艦ではない)
	イングランド	ENGLAND	DE-635	護衛駆逐艦
	サジッタリウス	SAGITTARIUS	?	
	クロウター	CROUTER	DE-11	護衛駆逐艦
	バトラー	BUTLER	DD-636	駆逐艦
	ピンクニー	PINKNEY	?	(輸送艦)
	マウント・マッキンレイ	MOUNT MCKINLEY	?	(大型艦らしい)
	ウィチタ	WICHITA	CA-45	重巡洋艦
	エリソン	ELLYSON	DD-454	大型駆逐艦

PBM マーチン哨戒爆撃機 (双発飛行艇) (マーチン・マリナー)
 PB2Y コンソリデーテッド哨戒爆撃機 (四発飛行艇)
 PB4Y " " (四発陸上機、B24海軍型)

・TK注② 航空特攻の両日の突入機 (「特別攻撃隊」による)

	部隊	機種	機数	搭乗員	発進基地
4月27日	第六航空軍 (陸軍)				
	第80振武隊	99高練	1機	1名	
	第109振武隊	97戦	1機	1名	
	第八飛行師団 (陸軍)				
	誠第33飛行隊	四式戦	5機	5名	
	誠第36飛行隊	98直協偵	1機	1名	
4月28日	菊水四号作戦 (海軍)				
	第六神雷桜花隊	桜花	1機	1名	鹿屋
	八幡神忠隊	97艦攻	3機	9名	串良
	第一正気隊	97艦攻	2機	6名	"
	白鷺赤忠隊	97艦攻	1機	3名	"
	第三早薙隊	99艦爆	14機	26名	第二国分
	第二正統隊	99艦爆	6機	12名	"
	琴平水心隊	零水偵	2機	5名	託問/指宿
	第六航空軍 (陸軍)				
	第61振武隊	四式戦	7機	7名	
	第67振武隊	97戦	6機	6名	
	第76振武隊	97戦	6機	6名	
	第77振武隊	97戦	8機	8名	
	第106振武隊	97戦	3機	3名	
	第108振武隊	97戦	1機	1名	
	第109振武隊	97戦	2機	2名	
	第102振武隊	99襲	1機	1名	
	第八飛行師団 (陸軍)				
	誠第34飛行隊	四式戦	4機	4名	
	誠第116飛行隊	97戦	2機	2名	
	誠第119飛行隊	二式双襲	2機	4名	
	飛行第105戦隊	三式戦	4機	4名	
			計	83機	118名

・TK注 陸軍海上挺進戦隊の両日戦没者 (「特別攻撃隊」による)

4月27日	第27戦隊	中城湾	15名	
	"	嘉手納沖	3名	
	第28戦隊	沖繩湊川沖	6名	
4月28日	第27戦隊	嘉手納沖	4名	
	第28戦隊	中城湾	4名	計32名

・TK注 海軍震洋隊の両日の海上戦闘はなかった模様。

沖縄「平和の礎」：回天関係刻銘状況

97.10.1 全国回天会

○：平成9年追加刻銘者

所属	氏名	配置	出身府県	刻銘場所	刻銘板位置	刻銘位置
					平和の火に向い 西側から／裏表	列 段
第1回天隊	河合不死男	搭	愛知	C-7	2-表	6-25
	堀田耕之祐	〃	大阪	C-8	4-表	7-3
	新野守夫	〃	徳島	C-9	5-裏	3-20
	赤近忠三	〃	鹿児島	C-11	2-裏	3-1
	伊東祐之(藤裕)	〃	岩手	C-11	4-裏	1-14
	猪熊房蔵	〃	東京	○C-12	4-表	5-8
	樽井辰雄	整	富山	○C-12	3-表	1-14
	横尾喜三郎	〃	新潟	C-6	3-表	6-23
	中島芳男	〃	岐阜	C-6	4-裏	3-28
	島田昌	基	佐賀	C-10	2-裏	3-24
	吉田洸	〃	茨城	C-4	6-裏	5-20
	河田直好(真)	〃	岡山	C-9	3-表	6-27
	田中金之助	搭	大阪	出身府庁より申請済		
	富永一喜(富)	整	福岡	県より申請中 整理番号4000-42794		

注：上記()内の時によって現在刻銘されている。

注：追加刻銘の状況についてしばしば沖縄県と連絡しており、最近では97.8.11付で通知があった。

第18号1等輸送艦

153名 刻銘済み

65名 出身各府県庁より沖縄県に申請し追加刻銘済み

6名 出身各府県庁に当会より要請中、未確認

1名 出身府県を厚生省に照会中、未回答 乗員計225名

伊号第56潜水艦(多々良隊)

福島誠二	搭	和歌山	○C-12	3-表	4-11
八木寛	〃	山口	C-9	4-裏	4-29
川浪由勝	〃	北海道	C-3	3-表	2-9
矢代清	〃	東京	C-5	4-裏	5-26
宮崎和夫	〃	北海道	C-2	2-裏	4-15
石直新五郎	〃	岩手	○C-12	4-表	1-18

伊号第44潜水艦(多々良隊)

上井秀夫(英雄)	搭	大阪	C-8	6-表	3-9
亥角泰彦	〃	京都	○C-12	3-表	3-4
館脇孝治	〃	福島	○C-12	4-表	3-22
菅原彦五	〃	宮城	出身県より申請済		

所属	氏名	配置	出身府県	場所	刻銘板	刻銘位置
伊号第36潜水艦（天武隊）						
	八木 梯二	搭	熊本	○C-12	3-表	7-21
	安部 英雄	〃	北海道	C-2	3-表	2-3
	松田 光雄	〃	茨城	C-4	6-裏	3-15
	海老原清三郎	〃	東京	C-5	3-表	7-12
伊号第47潜水艦（天武隊）						
	柿崎 實	搭	山形	C-4	5-表	6-23
	前田 肇	〃	福岡	C-10	3-裏	2-16
	古川 七郎	〃	岐阜	C-6	1-裏	2-1
	山口 重雄	〃	佐賀	○C-12	3-表	7-2
伊号第367潜水艦（振武隊）						
	千葉 三郎	搭	北海道	C-2	4-裏	5-5
	小野 正明	〃	青森	○C-12	4-表	1-13
伊号第361潜水艦（轟隊）						
	小林富三雄	搭	三重	C-7	1-裏	6-10
	金井 行雄	〃	群馬	C-4	4-裏	6-14
	斉藤 達雄	〃	茨城	C-4	4-裏	7-29
	田辺 晋	〃	千葉	C-5	2-表	3-27
	岩崎 静也	〃	北海道	C-2	3-裏	7-13
伊号第53潜水艦（多聞隊）						
	勝山 淳	搭	茨城	○C-12	4-表	3-30
	関 豊興	〃	秋田	○C-12	4-表	2-19
	川尻 勉	〃	北海道	○C-12	4-表	1-5
	荒川 正弘	〃	山形	○C-12	4-表	3-10
伊号第366潜水艦（多聞隊）						
	成瀬 謙治	搭	愛知	C-7	1-表	2-4
	佐野 元	〃	京都	○C-12	3-表	3-8
	上西 徳英	〃	福岡	出身県庁より沖縄県に申請予定		
伊号第58潜水艦（多聞隊）						
	伴 修二	搭	岡山	○追加刻銘済み（平生回天会手配）		
	小森 一之	〃	富山	○	〃	
	水井 淑夫	〃	兵庫	○	〃	
	中井 昭	〃	京都	○	〃	
	林 義明	〃	新潟	○	〃	

注1 「平和の広場」にある刻銘板は、「平和の火」を中心とする同心円上に配列された黒御影石で、屏風の形に繋がって並んでいる。

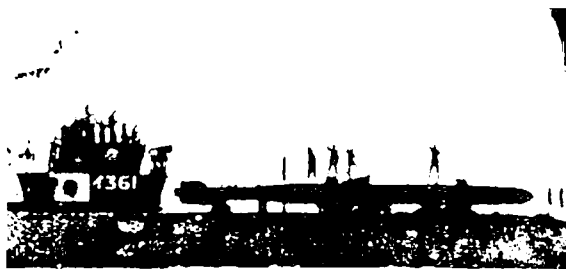
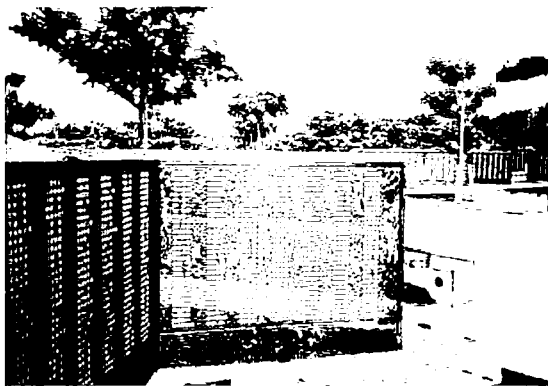
A、Bの各グループは沖縄県民、Cは沖縄県以外の国内各府県出身者、Dは米国を含む外国人の区域。従って回天関係はCに刻銘されている。

上記の表では、各配列の碑石を西側からの順番に数字で示し、その「平和の火」寄りの側の面を「表」とし、反対の面を「裏」として表現した。

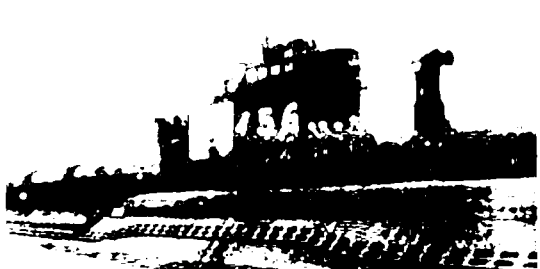
また、その各面における刻銘された位置を「左からの列/上からの段」で表示した。

注2 轟隊伊36潜及び伊165潜の搭乗員は戦没場所の点から刻銘されない。

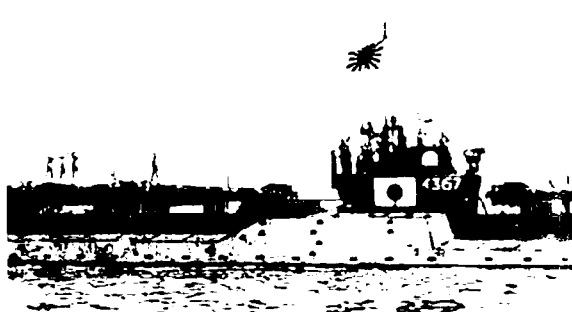
注3 潜水艦に乗艦中戦没した回天整備員については潜水艦乗組士官の会、伊呂波会が申請手続きをする。



轟隊 イ361潜



多々良隊 イ56潜



振式隊 イ367潜



天武隊 イ36潜

「戦史叢書捷号陸軍航空作戦」にみる 富嶽隊と萬朶隊

陸軍航空特別攻撃隊の比島進出

—航空特攻戦法採用の経緯

陸軍航空特別攻撃隊の魁である銚田教導飛行師団編成の九九双軽の飛行隊（のちに萬朶隊と命名）長 岩本益臣大尉（53期）および濱松教導飛行師団編成の富嶽隊（長 西尾常三郎少佐（50期）は、レイテ方面航空総攻撃には間に合わなかったが、萬朶隊は十月二十二日銚田を出発して二十六日リバに到着した。富嶽隊は二十六日濱松を出発していた。

特攻戦法の起源

体当たり攻撃を戦法化する考え方は、陸軍では今次戦争の中盤、連合軍の反攻激化に伴うわが航空部隊の悪戦苦闘を契機として逐次表面化した。昭和十八年三月初め、ラバウルからラエへの第五十一師団の輸送船団が、連合軍の航空攻撃によって全滅したころ、同方面で既に約三ヶ月、力戦奮闘した飛行第十一戦隊の上登能准尉は、体当たり攻撃機の整備を意見具申した。それはB-17に対し全弾を撃ち尽くし、多数

の命中弾を与えていることが明白であるにもかかわらず、なお撃墜できないことを幾度も経験した結果であった。この意見具申は現地軍どまりとなつたが、陸軍中央部には、第一線操縦者の切実な気持が逐次に反映した。十八年五月上旬、同戦隊の小田忠大軍曹は、

同軍曹には今村第八方面軍司令官から個人感状が与えられ、全軍に布告された。また、このころビルマ方面の防空戦闘に、陸軍戦闘隊がB-24に対し一式戦闘機をもって数次の体当たり攻撃を加えた。

彼我の航空戦力には、量質両面ともあまりにも大きな懸隔があった。そしてわが国の技術生産力では、とうてい目前の戦局に合する改善が困難であった。もはや尋常一様の戦法戦技では難

局の打開が不可能であることを、第一線の空中勤務者は痛感しているのであった。このように、体当たり攻撃はまず敵機撃墜を対象として考えられた。飛行機への体当たりは、目標の一部を破損するだけでも撃墜の可能性が大きく、しかもわが方は九死に一生の生還の途がありうる点で、艦船に対する体当たりと大きな差異があった。必死を覚悟

で遂行しなくてはならぬが、必ずしも攻撃即死ではないのであった。

昭和十九年初期、陸軍中央部の関係者は、航空特攻戦法の検討を開始した。それは主に艦船体当たり攻撃を対象にしたものであり、春季には器材の研究にも着手した。

それは対米戦法において、一挙に多大の生命の犠牲を強要し敵の戦意を挫折させる最も有効な方法と判断されたからである。

このような情勢のとき、十九年五月下旬、飛行第五戦隊長高田勝重少佐は、連合軍のビアク島来攻に際し、独断で複戦四機を率い、敵艦船を攻撃自爆した。寺内南方軍総司令官は感状を与え、全軍に布告した。当時爆装戦闘機の体当たりにより、駆逐艦級の艦艇を撃沈できる戦例として、大きな反響をよんだ。現地では艦船攻撃に際し、爆弾投下前に被弾、生還の途がないと判断される場合に敵艦船に体当たりを決意した操縦者が、機上で爆弾信管の安全装置を脱するように装置を改修したのもあった。

特攻隊の編成

昭和十九年春季、陸軍中央部の航空関係者は特攻戦法の必要性に関し、ほぼ意見の一致をみた。

当初の考え方は精鋭な要員と器材で特攻隊を編成し、一挙に大戦果を獲得して敵の戦意を破砕することを重視した。陸軍ではまず当時の優秀機である四式重爆撃機および九九式双発軽爆撃機を改修する方向で進んだ。前者は八〇〇匁の爆弾二発、後者は八〇〇匁爆弾一発を搭載した。艦船舷側に衝突すると機首の導爆装置の作用により、投下された爆弾が吃水線下で炸裂する着想であった。

特攻隊員は志願者をもって、充当することを根本方針とされた。人柱的な必死の攻撃であるから、要員は必ずしも高い練度は必要でなく、いわゆる係累が少ない青年を選ぶという考え方が基本的であった。しかし、将校下士官の配分、その出身別、隊長あるいは中堅幹部などを考慮すると、その選定は決して簡単ではなかった。陸軍中央部が準備した最初の特攻二隊（萬朶、富嶽）の隊長は、ともに最精鋭の中堅幹部であった。

特攻隊の編成で激しい論議を生じたことは、これを制式の軍隊として天皇に上奏裁可を仰ぐか否かであった。

甲案は特攻戦法を中央が責任をもって計画的に実行するのであり、その成果を発揮するには、隊長の権限を明確にし、その隊の団結、訓練を充実でき

るような正規の軍隊編成とすることが必要であるというのであった。

乙案は特攻の要員と器材を第一線兵団に増加配属(陸軍大臣の部署として陸密により発令)し、第一線指揮官が臨時に定めた部隊編成とすべきであるというのであった。それは技術生産教育等の不振を、第一線將兵の生命の犠牲によって補うことを中央部、特に天皇の名において命令するのは適当でないという理由によるものであった。

この論議は特攻戦法の規模拡大とともに、長く続けられたが、最後まで後者の方式が採られた。すなわち、表面的には一般の部隊に準じ、隊名、隊長などが定められたが、厳密な意味から、その隊長は隊員の人事、教育、賞罰等に関する完全な統率権がないのであった。

十九年七月、陸軍中央部は濱松教導飛行師団(旧飛行学校、六月二十四日に改編)に対し重爆の特攻隊を、鉾田教導飛行師団(旧飛行学校)に対しては双軽の特攻隊をそれぞれ編成(厳密な意味では要員器材の差し出し)することを内示したようである。

八月中旬ころ、四式重爆、九九双軽の改修が着手された。

萬葉隊の編成と比島派遣

十月四日、航空総監部からいよいよ双軽体当たり部隊編成の内連絡を受けた鉾田教導飛行師団長今西六郎少将(27期)は次の所見をいたしていた。

体当たり部隊の編制化は上気の保持が困難で統御に困り、かえって戦力が低下するだろう。

この種の決死隊は第一線で情勢が真に緊迫して、皇国の興廃がこの一戦にあることを將兵一同が認識した時に、下部から盛り上げる氣勢を巧みにとらえて自然に結成された殉国の結晶によって決行されるのが適当であり、内地部隊として常時編成しておく性質のものではない。

常時編成しておく主旨は使用機種慣熟、強固な団結保持のためであるが、機種は特別慣熟を要するとも考えられないし、また団結はかえって破壊されるだろう。

急の間に合わず懸念ならば、器材を常時第一線に配置しておけばよろしいことである。

人の心は一日の中でもたびたび変わるもので、殉国の精神に懸念のない多数の青年を長日月苦惱せしむるものではない。真に体当たりが必要の場合にこれらの青年で遅疑するものがあるはずはない。要は情勢を

よくみて機会をとらえることである。天候の急変、器材の不調による攻撃不能の場合を考慮して、使用機には最小限度の生還可能な方法を設けるべきである。

十月十三日、今西少将は航空総監部に連絡し、サイパン攻撃特別任務部隊のことにあわせて体当たり部隊の編成について打ち合わせた。

中旬末、改修された双軽が鉾田に到着した。この特異な改修(体当たりをしなない限り、爆弾は投下されない状態になっていた)部位を見た少数の幹部は、一様にその用法を不審がった。

このころ今西少将は部隊首脳に、初めて特攻隊当たり部隊編成の件を説明しその選定方法について意見を聴取した。「志願者を募れば、全員が志願するであろう。指名されればそれでよろしい」というのが、その場の結論であった。十月二十日、編成の命令があった。まだ要員は決定していない

が、壮行の会食が行なわれた。今西少将は独り苦惱を続けていた。二十一日、岩本大尉以下一六名の隊員が発表された。

二十二日朝、航空総監代理の総監訓示、今西少将の訓示を受け、部隊全員が見送るなかに鉾田飛行場を出発し、立川では審査部に寄り、爆弾の安全装



鉾田出発前の萬葉隊(中列左から三人目岩本隊長)

置離脱および緊急時の弾爆投下を可能にする若干の改修に關して竹下福壽少佐らの助言説明があった。爾後上海、臺灣經由二十六日リパに到着したのであった。

注 今西日記(十月二十六日)に「体当り機、空中爆弾投下可能ナラシム」と記述されている。緊急時の最小限の安全措置に關し、正式に改修が認められたものと考えられる。

富嶽隊の編成と比島派遣

濱松教導飛行師団(長 川上清志少将(30期))では、特攻隊編成の内示を受けてから第一教導飛行隊(長 大西豊吉中佐(40期))を母隊として編成された。

西尾少佐以下の操縦者は、大西教導飛行隊長が候補者にそれぞれ面接して、志願を確かめた要員であったが、整備、機上機関要員の大部は十月二十四日飛行隊長から、特別任務要員として南方派遣を命ぜられた。全員が四式重爆撃機の経験豊富なものであった。

翌二十五日、改修された四式重爆撃機が要員により、岐阜から濱松に到着した。通信、酸素以外の装備を一切取りおろし、単操に改修され、操縦室風防ガラス以外の開口部を閉鎖してある機体は、見馴れた四式重爆撃機とは別

個の飛行機に感じられて異様であった。二十六日、参謀総長代理、菅原航空總監が臨席して命名、出陣式が行なわれ、部隊全員の見送りを受けて一四〇〇濱松飛行場を出発した。

注 両隊の隊名は梅津参謀総長の発意によるもので、藤田東湖(幕末の水戸藩士、儒臣、攘夷論者)の「正氣の歌」が出典である。萬朵隊は十月二十九日現地リパで命名された。なお、両隊以外の特別攻撃隊は八絃飛行隊として編成され、比島到着後富永軍司令官の発意になる八絃隊、一字隊、靖國隊等と命名された。

両機種(の爆装(九九双軽海軍八〇番弾一発、四式重海軍八〇番弾二発))にあたり、富嶽隊の場合弾倉内に一発は懸吊できるが、他の一発は操縦室後方に縛り固定された。また、両機種とも弾倉内に完全に収納できないため、弾倉扉は若干開いた状態のまま緊縛しであった。

両隊の活躍

特攻隊の出動準備と萬朵隊の損害
特攻隊萬朵隊と富嶽隊はそれぞれ二十六日リパ、二十八日クラーク到着以來同地で厳しい訓練を続けていた。

八〇〇貯爆弾を装着し、飛行場のピ

スト(滑走地区内に設置した簡易な空中勤務者控所)を目標に行なう飛行訓練の激しさは所在の部隊を驚嘆させるものがあつた。寺田第四航空軍参謀長は二十九日リパに赴いて、隊号命名を伝達し、十一月三日はマルコットに富嶽隊を視察した。

富嶽隊長西尾少佐は、十一月一日夕バコロドに飛んで戦闘司令所の富永軍司令官に申告を行ない、訓示を受けた。で、西尾隊長らは同夜半クラークに帰還した)

萬朵隊長岩本大尉以下五名の幹部は五日朝、双軽でリパを出発、作戦連絡のためマニラに飛行中、ニコラス飛行場南西付近で来襲中のグラマン戦闘機群と遭遇交戦し、全員が戦死を遂げた。特攻攻撃の決行を前にして萬朵隊は隊長以下全将校を失つたのである。

五日、米軍艦載機の空襲時に富嶽隊三機が小破した。第四航空軍では出動待機中の特攻隊機の被害を避けるため、富嶽隊をバラワン島―北ボルネオ地区に移動させることにしていたところ、移動予定の六日、ルソン方面は再び空襲を受け出発を中止したが、依然ルソン島東方にあると判断された米機動部隊の攻撃に特攻攻撃が検討された。

六日二三〇〇、富嶽隊に出動が命ぜ

られた。西尾隊長以下四機は七月〇三〇〇ラモン湾東方洋上に米機動部隊を索めて出動したが、目標を発見できなかったため引き返した。

山本達夫中尉(55期)機はいったん基地近くまで引き返したのち、単機でふたたび東進し、遂に敵を攻撃したようであるが成果の細部は確認できなかった。

第四航空軍の特攻攻撃部署と

萬朵隊の攻撃

十一月十一日オルモック付近にわが船団を攻撃した米機動部隊の位置は明確に偵知されなかったが、ほぼカタンゾアネス島東方海面と判断された。

第四航空軍は富嶽隊をもって十二日朝これを攻撃させるとともに、レイテ湾に到着していると判断される後続船団基幹の艦船(戦艦等一〇隻、輸送船三〇隻等)に対しては萬朵隊四機による攻撃を、それぞれ部署した。

特攻隊の直掩ならびに戦果確認には、十一日レガスピに帰還していた戦闘隊が実施する予定(十二日朝レガスピ上空から同行する)であり、別に司偵一機が先行偵察と戦果確認に任ずることになっていた。

十二日早朝、第四航空軍武藤善市参謀が軍偵でレガスピに飛び、直掩と

戦果確認実施の指導に任じた。

五日、戦死した岩本大尉らの遺骨を抱いてカロカン飛行場を出発した萬葉隊田中逸夫曹長以下四機は、第三十二、第二十戦隊、第二十四中隊の二機に掩護されサマル島東方からレイテ湾口へ前進した。〇八三〇ころレイテ湾に向かう人、中型輸送船と護衛艦艇群を発見した田中機は、翼を振って合図するや急反転降下し、高度五、〇〇〇米から直掩戦闘機も追従しきれない猛烈な急降下攻撃で突進して行った。同じく僚機の壮烈な攻撃が続いたあと、もうもうたる黒煙をふき炎上沈没寸前の大型艦船二隻と炎上中の小型船一隻を確認した直掩隊は、帰途P-38と軽戦のち帰還したが、掩護中被弾した第二十四中隊渡邊史郎伍長は、特攻機の命中した目標に白らも体当たりした。

十三日の大本營発表は萬葉隊による戦艦、輸送船各一隻撃沈の戦果を報じ、さらに田中曹長、生田留夫曹長、久保昌昭軍曹の三隊員および渡邊伍長に対する寺内南方軍總司令官の感状授与と四勇士の少尉進級、特旨による論功賞が発令された。

注 十一月二十八日勅令により、特別攻撃に任じ殊勲を全軍に布告された下士官はすべて少尉に任ぜられることになった。この後、特別攻撃に任じた全特攻

隊には、寺内總司令官から感状が授与された。

富嶽隊の攻撃は未明から出動した司令官が、機動部隊(潜水艦の探知によりレガスピ東方三五〇軒付近を行動中の情報)を確認できないため、出動が延期された。

富嶽隊の攻撃

十一月十三日マニラ、クラーク地区を攻撃していた米機動部隊(空母五隻基幹)は、マニラ六〇度、三〇〇軒付近にあるものと判断された。第四航空軍はこれを特攻攻撃することに決し、十一日以来待機中の富嶽隊に出動を命じた。

クラーク地区には朝からグラマンD6Fが断続的に来襲していた。二六〇〇ころ、敵機が最終的に離脱したあと、山口総参謀副長ら多数の見送る中を、西尾隊長以下五機は一七〇〇ころマルコットを出発した。戦果確認のため第二戦隊の司偵二機が同行したが、西尾隊長機は一八〇〇ころクラーク東方約四〇〇軒の目標近くの上空で、グラマン戦闘機二十数機の攻撃を受けて自爆し、この間に國重武夫准尉機が戦艦一隻に体当たりを遂げた。

他の三機中一機は発動機不調のため途中から引き返し、攻撃の機を失した。

二機も帰還した。

富嶽隊の出動

十一月十五日一六五〇海軍哨戒機はリアンガ(ミンダナオ北東海岸)東方一八〇哩を西進中の戦艦四隻、駆逐艦六隻等の米軍部隊を発見した。

第四航空軍は特攻隊をもってこの米艦隊を攻撃することに決し、富嶽隊根木基夫中尉以下三機が出動した。しかし、目標を発見することができないで引き返したが、幸保榮治曹長機は未帰還となった。

12月に入ると、内地で編成した他の特攻隊が次々と到着し、突入するので、富嶽萬葉隊のことだけを取り上げた記事は余り見当らない。そこで突入したときの景況はよく判らないが、載っている箇所だけを抜き書きしてみる。

(12月16日) 払暁に富嶽隊の二機(石川広中尉以下四名)が直援機四機と共にクラークから出動した。途中から戦闘機二機が引返し、未帰還四機の戦果は確認できなかった。

(1月10日) 〇四〇〇ころ富嶽隊の一機、曾我邦夫大尉(55期)は単独で攻撃に出動した。この日は他の特攻隊も含めて七機出撃し、大爆発三隻、空母一隻、輸送船三隻炎上中と報告された。

富嶽隊の根本基夫大尉(55期)は、

一月十一日の出撃直後不時着したが、富嶽隊最後の二機による必成を期していた。青木戦闘飛行集団長はその希望を容れ、十一日夕リンガエン湾の目標偵察のための司偵に搭乗させた。その晩周到綿密な計画を立て、西尾隊長以下のかたみを抱いた整備班長進藤浩康大尉(51期)、宇山富福伍長と共に、十二日私暁約一時間前に離陸し、ルン島東方上空で待機し欺騙行動をした後、払暁リンガエン湾に超低空で進入し、大型艦に命中した。

これをもって富嶽隊と萬葉隊は消滅した。



クラークにおける富嶽隊

大尉	中尉	中尉	中尉	曹長	曹長	曹長	軍曹	軍曹	軍曹	伍長	伍長
岩本	園田	安藤	川島	中川	田中	生田	久保	石渡	鶴沢	近藤	奥原
益臣	芳浩	孝己	克己	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
陸士53	陸士55	陸士56	陸士56	少候24	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
大6	大10	大10	大11	大5	大7	大10	大13	大13	大12	大13	大12
ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

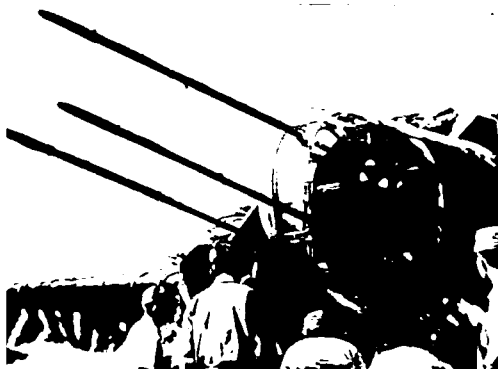
万葉隊 (九九双軽)

中尉	軍曹	少佐	少尉	少尉	准尉	曹長	曹長	曹長	軍曹	中尉	曹長	曹長	伍長	伍長	大尉	大尉	大尉	伍長	
山本	浦田	西尾	柴田	米津	国重	島村	莊司	幸保	須永	石川	本谷	古沢	丸山	曾我	進藤	根木	宇田		
達夫	六郎	常三郎	禎男	芳太郎	武夫	信夫	楠一	治一	義次	廣次	友雄	幸雄	茂雄	邦雄	浩康	基夫	富福		
出身別	陸士56	昭	陸士50	陸士57	少候24	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	
生年	大9	大8	大5	大13	大7	大3	大8	大7	大7	大8	大7	大11	大7	大10	大10	大9	大8	大11	大13
戦死場所	ラモン湾東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方	クラーク東方
戦死日	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911	1911
	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7

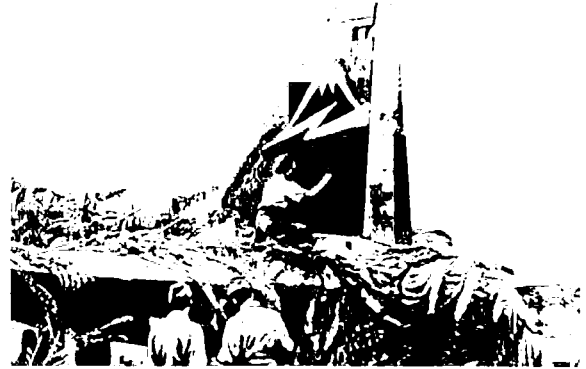
富嶽隊 (四式重爆)

大尉	中尉	中尉	中尉	曹長	曹長	曹長	軍曹	軍曹	軍曹	伍長	伍長
岩本	園田	安藤	川島	中川	田中	生田	久保	石渡	鶴沢	近藤	奥原
益臣	芳浩	孝己	克己	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
陸士53	陸士55	陸士56	陸士56	少候24	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
大6	大10	大10	大11	大5	大7	大10	大13	大13	大12	大13	大12
ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5

大尉	中尉	中尉	中尉	曹長	曹長	曹長	軍曹	軍曹	軍曹	伍長	伍長
岩本	園田	安藤	川島	中川	田中	生田	久保	石渡	鶴沢	近藤	奥原
益臣	芳浩	孝己	克己	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
陸士53	陸士55	陸士56	陸士56	少候24	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
大6	大10	大10	大11	大5	大7	大10	大13	大13	大12	大13	大12
ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空	ニコラス上空
19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5



万葉隊 九九双軽



富嶽隊 四式重



99双軽特攻 少飛会海法画



万葉隊